＋The Phantom of Moonlit＋

蒼羽　レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＋Ｔｈｅ　Ｐｈａｎｔｏｍ　ｏｆ　Ｍｏｏｎｌｉｔ＋

【Ｎコード】

Ｎ５４９８Ａ

【作者名】

蒼羽　レイ

【あらすじ】

修学旅行に新一が現れるという噂が流れていた帝丹高校。その時フロッピーの謎を解読したコナンは灰原の静止をふりきり、工藤新一の姿で修学旅行に行くことを決心する。新一は、すれ違っていた蘭との距離が狭まる一方、灰原と離れたことにより彼女にせまる組織の影が…。舞台は『大阪』。服部も混ざり、事件はさらに複雑化！！いよいよ【キッド編】から【工藤新一復活編】に突入！！

『ｐｒｅｌｕｄｅ』（前書き）

【前回までのシノプシス】
キッドの狙うダイヤが隠された【宝石の館】を訪れたコナンたち。コナンたちの他に宝石愛好家のメンバー５人とともに今野総一郎という人物が隠したブルーダイヤを手に入れる。トラップが張り巡らされていたため、一命は取り留めたものの灰原と蘭が毒ガスを吸ってしまい…。そんな中、ブルーダイヤと一緒に隠されていたあるフロッピーに黒の組織と関連が……。

『prelude』

館のようにそびえたつ家。
日本ではあまり見かけない、西洋風の古式の家は、長年、不在であった主の帰還を歓迎しているようだった。
しかし、「彼」は家に入ったかと思うと何時間もしないうちに家から出てくる。
肩にスポーツバッグを背負い、家の鍵を閉める。
門のところまで歩いていくと、「彼」がゆっくりと門を押せば。キィィィと鉄のサビついた音が響く。
その時、１度だけ「彼」は自分の家を振り返った。
「この姿」で再び家に帰ることができるのは、いつになるかなと思いながら、その家に向かって穏やかに微笑むと、門を開けて出て行った。
ガッシャンと門と門が閉まる音を耳にしながら、歩き続ける「彼」の口元には笑みがたたえられていた。
これからおこるであろうと予測される未来に、不敵な表情を浮かべて……。

『工藤』

掲（かか）げられた表札の名前で名乗ることを許された姿で「彼」はここへとやってきた――

と――――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――
「全員いるかー？各自、周りを確認してくれ」

先生が、生徒全員をバスに乗り込ませ、それぞれの席へとつかせた。
あと1人を残して、全員出席している。
だが来ることになっている生徒は、出発時間を過ぎてもこない。
他のクラスは、先にいかせて今はB組のバスだけが残されていた。
なにしろその生徒は今まで休学中だったため、本当に来るのかどうかさえ半信半疑であるのだ。
15分すぎて、あと5分待っても来なかったら出発しようと運転手に告げる。
そうして先生はその問題児の到着をあと5分だけ待つことにした。

一番後ろの席より1つ前の席に乗っている会沢(あいざわ)が、後ろを向いて他の男子に話し掛けた。
「なぁ、あの噂デマ？」
「さーな…学祭の時もそうだったけど、アイツって神出鬼没じゃん？またおいしいときにでて来んじゃね？」
後ろに座る中道が、窓側の縁(へり)に頬杖をつきながら言う。
「殺人があればくるんじゃねーの？」
にやりと誰かが呟いた言葉に、
「よせよ。修学旅行にんなことおきてたまっかよ」
滝川が携帯をいじりながら言うが、さほどこのネタに興味はないようだ。
しかし、他の男子はそのネタにのりのりで、にやけた笑いをしながら会沢のネタに拍車をかけた。
「や、でもな修旅はちゃーんと来ると思うぜ、俺」
「なんてったって、青春の思い出作りだぜえ？アイツだって一応高校生だしー、それになんつったって、外しちゃならねぇ理由がここにあるしさァ」
にやにやと笑う男子群が一斉に一人の女子生徒を見た。
「な、毛利？」
「え？」とずっと窓の外を眺めていた蘭が、きょとんとした顔で振

り向いた。
「夫の到着を健気に待ってるなんて妬いちゃうねー、毛利」
口笛とからかいの声があげられて、蘭の顔は一気に火照った。
なるほど図星か。
「そ、そんなんじゃないってば！！」
隣に座る園子は、あまりにもわかりやすい反応に思わず男子に同意してしまう。
「はいはい、そんなに顔赤くしなくても私らはちゃーんと分かってるからー！なんなら旦那にメールしてあげよっか？早くこないと最愛の妻が、旅行先で節操のない男どもに食われちゃうわよなんて言ったらとんでくるわよきっと！！」
「だ、だからわたしは新一を待っていたわけじゃなくて…」
その時蘭の言葉をさえぎって、会沢が窓の方を向いて叫んだ。
「オイ見ろあそこ！！」

会沢の視線をたどって、みんながそっちへと振り向く。
すると校門からゆっくりとこちらに歩いてくる者が見えた。
帽子を目元までかぶりスポーツバッグを肩につるしてバスに向かって歩いてくる。
その人物。
「――新一？」
うそ……。どうして？
半信半疑だったクラスの人たちは、その蘭の言葉で確信を得たようだ。
その瞬間どっと生徒がざわめきだした。

園子は彼を眺めながら、乾いた笑みを浮かべる。
「あーあー、相変わらずオイシイトコははずさないわね、アヤツはー…」
キザな登場は毎回のことだけど…。

園子は「さて」と言いながら席をたった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――――――

新一はバスガイドにスポーツバッグを渡した後、軽やかにバスに乗りこむ。

先生は開いた口がふさがらないといった表情で、あっけらかんとして彼を見ていた。

少しも変わらない様子であるが、やはりどこか大人びたような空気が流れるのは気のせいだろうか？

「お久しぶりです、先生」

「ああ。しかし遅いぞ、工藤。来ることも半信半疑だったから、あと5分たってこなければ、出発するところだった」

「すみません。ちょっと仕度に戸惑っていたので」

もちろんそれはウソだ。

工藤新一の存在を最小限にするために、他のバスには先にいってもらう必要があるので、新一はわざと遅れてきたのだ。

「先生この前も言いましたが、僕のことは他言無用でお願いします。この修学旅行も欠席扱いということで…」

にっこりと微笑む隙のない笑みは、真意を明かさない。

高校2年生で名探偵と名が知れ渡る。

今抱えている事件で逃走中の犯人が彼のことを狙っているという説明をうけたが、それほど危ない事件を、まだ未成年の彼が追っているのかと思うと、教師という立場に置かれている自分もいたたまれない。

「工藤、お前大丈夫なのか？一体何をしてるんだ？」

新一はその問いかけに、静かな眼差しを先生に送る。

生徒と教師という立場ではない。彼は大人との接し方に慣れていた。

それ以上の詮索を許さないと言う風に口を閉ざすので、自分も言葉につまる。
「事件のことはすみません。僕の口からは何も言えませんが、心配要りません」

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

先生との話を終えた後、席を探している新一に園子はこっちこっち！と手をふった。
「蘭の隣が空いてるわよ！！」
いつのまにか後ろの席に座っていた園子が蘭の隣の席を指差している。
「え？園子？」
蘭の隣はさっきまで園子が座っていたのだ。
蘭が驚いた表情で後ろを振り向くと、彼女はウインクしてみせた。
「いいっていいって。２人一緒に座んなよ。あんたたちの恋仲を邪魔したりしたら、馬に蹴られちゃいそうだもの」
その周りに座る男子たちがにやっと笑って、挨拶代わりに茶化してみせた。
「行く早々夫婦の愛の見せ付けかよー」
クラスの注目を一身に浴びて、新一はやっと目深にかぶっていた帽子をとり青の双眸の輝きをみせた。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

「あの人が工藤新一ですか？」

本堂は前の方に座っていたにも関わらず、噂の新一をみるために園子の隣までやってきて尋ねた。
片手に眼鏡のヘリをつかみ、睨むように目を細めて新一を真剣に吟味している顔が、ギャグとしか言われようのないあまりにも変な顔だったので、園子は思わず吹き出した。
それから園子は得意そうにウインクをしてみせる。
「そーよ。工藤新一君…噂の名探偵。それから将来蘭の旦那になる男」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――

新一が蘭の隣に座る。
目の前に座る新一がどこか幻のようだった。
蘭の目に映る新一は、どこも変わったところはない。
けれど、おかしいのは久しぶりに会ったのに、新一のことをなつかしく思わないのだ。
むしろ……いつもそばにいたようなそんな感覚。誰だろう？誰か身近に見知った子がいるような気がする……。

蘭がその答えに行き着く前に、新一が笑って話しかけてきたので、一瞬つながった答えが、また頭の奥深くへと消えていってしまった。
「よぉ、蘭。久しぶり」
その笑顔にドキリとさせられる。気持ちが全て溶け出すような感情にとらわれて蘭は思わず微笑んだ。
やっぱり、いろいろ考えるのはやめよう。
今は、目の前にあるものが真実だと信じていたい。

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
──東京──
こじんまりとしたアパート。
全ての窓に黒のカーテンがかかり、日の光はほとんど入っていない。
その住人は驚愕に顔をひきつり、がくがくと体が震えていた。
思わぬ来客。威圧感と殺意。
黒のコートを身にまとい、かちゃりと銃口を向ける。
「言え」
その無慈悲で残酷な殺意の宿る目に殺される。
「し、知らない。本当だ！！確かにバッカスの研究をしていたが、ある日突然データが消えたんだ！！全データの内容は宮野厚司しか知らなかった。だ、だが、ヤツには娘が２人いただろう？その１人…なんていったか…シェリー…そうだ！シェリーなら知ってるはずだ！！彼女は少しの間その研究も携(たずさ)わっていた…だ、だから」
「残念だな…シェリーは組織に敵対して処刑されている。逃亡したがな」
「ま、待て…ジン！私を殺すとバッカスの研究の一部がわからなくなるぞ！」
「てめーが心配しなくても、バッカスを見つければすむことだ。長年の逃亡生活にそろそろ疲れただろ？楽にしてやるよ…あの世(あっち)で後は生活するんだな」
「まっ…」
引き金を引かれる瞬間を、目にやきつけられる。
ドンっという銃声の後、男はドサッとその場に崩れ落ちた。
虫の息ではあるが、かろうじて生きているのか苦しそうにそこにもだえている。
冷たい視線でその男を見下げながら、ジンは2発目の弾丸をその男に向けた。
銃声の音が鳴ったとき、その男はかすかにびくりとしてそのまま動

かなくなる。
その死体に一瞥(いちべつ)してきびすを返すと、ジンはその部屋を出て行った。

「兄貴、何かわかりやしたかい？」
ブラックカラーのポルシェで待っていたウォッカは、ジンがポルシェに乗り込んでエンジンをかけているときにすかさず尋ねる。
「いや、ヤツはどうやら何も知らねぇらしい」
タバコに火をつけて煙をはくと、ジンは言った。
「キルシュが例の館でしくじったからな。フロッピーはなかったと報告しているが…」
「本当になかったんですかい？」
「さーな、ヤツは得たいがしれねえ。コードネームはあるが組織に入ってるわけじゃねーらしい」
「そんなヤツをどうして、生かしておくんですかい？」
「あの方のお気に入りだ。あの方がいつも連れてきて、ヤツを動かす。一目おかれるほどの策士家だ…」
「そうだ、ジンの兄貴。兄貴に頼まれていたリストがありますぜ。キルシュと一緒に館の宝石を探したって言う…」
ウォッカが、館のリストの紙を取り出しジンに渡す。

・円谷　光彦
・小嶋　元太
・吉田　歩美
・今野　亜祐
・徳土　大輝
・　辻　亜弥
・伊達　寛史
・三澤　尚斗
・江戸川　コナン
・毛利　小五郎
・灰原　哀

そのリストを見て、ジンがあからさまに眉をつりあげる。
「毛利小五郎だと？」
「や、確かに毛利小五郎もいたにはいたんですが、途中でどうやら病院に行ったらしいんでさァ。最後までいたのは、ガキ４人と今野亜祐、徳土大輝、辻亜弥、伊達寛史ってヤツだけですぜ」
「なるほどな」
にしても、江戸川コナン…あのガキも一緒。
「…大阪に向かう」
「……え？」
「バッカスの行っていた研究所は大阪にある。行ってデータごと研究所を消しゃあいい。それにキルシュに殺しを１つ頼まれている」
「え？キルシュにですかい？」
「ベルモット経由だ。アイツも何かかんでいる可能性がある。ＦＢＩも俺たちのしっぽをつかもうと何かやらかそうとしてるらしいが、ヤツらに勘ぐられる前に消しに行く」
そう言って、ジンはもう１度リストを見た。
偶然か？と毛利小五郎との関連を疑ったみる。
ポルシェを出すと、大阪方面へその車は動き出した。

『ｐｒｅｌｕｄｅ』（後書き）

こんちゃーす！始めまして、お久しぶりです。蒼羽レイです。
コナンノベルズとリニューアルしたところで、改めてｍｏｏｎｌｉｔの方もちょこちょこっと手を入れながら再出発です。いやぁ、もうさすごーい昔のことでさ、自分が書いた小説なのに内容覚えてないのよ！やばい。だから最初からレイも読んでそうだ！思い出した。こここう進むんだよって確認しながら手を加えてました。
すごいびっくりしたのが、この作品すごい昔のものなのに読んでくれている人がいたってことです。評価のコメントみて驚きましたよ。続き早く読みたいってみんなが言ってくれたことに。すごい嬉しいです。これは書かなきゃだめだと思いました。

実は、大事なコトを暴露します。サイトがリニューアルする前にこのままじゃおわらねえ、一生おわらねえよ…と（長編だからねあたし。サイトの更新も遅れ気味だったから汗）思い、この作品「過程」要素が強かったから、打ち切ろうともくろんでました。ぎゃっごめん！すみません！！怒らないで←それで当初ｍｏｏｎｌｉｔが終わり３章で書く予定だった『生命線の命玉』の連載を始めたんですよ。そう汗））ってことはー、はいｍｏｏｎｌｉｔの続編が『生命線の命玉』なんです！ってことで、「生命線の命玉」の更新はしばらくお預けになりましたー。ご了承ください。
だってね、あんな…続き望まれてるのに書かないなんて最低～あたし最低～。書きたかったよ。書くともさ！復活だ★
見捨てずにいてくれてありがとう。

だけどとりあえずあと何話かな？４話？手加えて更新させなきゃです。もう６話は書き終わってるから、あとちょっと待っててね。

では、長文大変失礼しました！

『ｇｏｓｓｉｐ』（前書き）

前回言い忘れましたが、この物語は、コナンノベルズの「宝石仕掛けの青ダイヤ」の続編です。読まれていない方でも話わかります。前回のあらすじを読んで本編を読み進めてください。

『gossip』

4日前――

「蘭、蘭！！大ニュースよ！！」

「どーしたの？園子」

園子の興奮ぶりに蘭は気迫負けしながら、何事かと思う。

一方イスに座っているコナンは「なんだ？こいつ」という目で園子を見上げる。

（園子の持ってくる情報って、いつもロクなもんじゃねー気が…）

それにここは、一応病院であるのだが…

（この様子じゃ、静かにしろって言ってもムダだな）

コナンは、先ほど買ってきた缶コーヒーを開けながら、園子の話を暇つぶしに聞いていた。

「もうクラス中に広まってる噂よ！！だから真相を蘭に確かめようと思って！」

「わたしに？」

中指を使い、缶の栓を開ける。

どーせくだらねえ噂だろーと、缶を口につける。

「新一君、修旅に来るっていう噂があるのよ！！ほんと？」

もう一口飲もうとして口に入れた缶コーヒーが、園子の発言に思わず吹き出した。

――ブッ――！！

「ゴホゴホ…ゴホッ！！」

「コナン君！？大丈夫？」

「そ、園子姉ちゃん？い、今なんて？」

コーヒーが顔に飛び散っているコナンを蘭が抱き寄せてベッドに座らせると、ハンカチで口の周りをふいてやった。

「なに？このガキンチョ…いきなり」

「だ、だからさ、その噂って一体どこから広まったの？」

「さあ？いつのまにかクラスに広まってたわよ。どこからって言われてもねぇ」
「でも、園子？新一そんなこと言ってなかったよ？修学旅行行くなら行くってちゃんと言うと思うけど」
「うーん…蘭にも言ってないってことは、デマかあるいは…」
ちらっと蘭の顔を見て、園子がにやっと笑った。
「蘭の驚いた顔が見たくてわざと内緒にしてるのかもよ！」
（ハ……）
いつものことながら、どーしてもそっち方面へ話を進めたいらしい。
2人があきれているにも関わらず、園子は遠くを見つめながら、手を組み自分の世界へと入っていった。
「きっとそうよ！！なんてったって、2人はいつ会えるか分からない境遇なんだから、この修旅でアバンチュールな思い出を楽しんで、2人の関係はより親密で濃厚に…」
蘭は乾いた笑みを浮かべた。
「園子…」
（ハハ…修学旅行行けんなら、普通に学校行ってるって…）
「とにかく！！蘭、あんたは早く治すこと！！修学旅行まであと4日なんだから…行けなかったら超悲惨よ。それに、今回面白いことになりそうだから…」
にんまりと笑う園子に、コナンは嫌な予感を覚えた。
「おもしろいこと？」
「名づけて、蘭争奪戦よ！」
「「はぁ？」」
蘭とコナンが眉をひそめている中、園子は内容を話し出す。
「A組の留学生、蘭知ってるわよね？」
「うん。神君でしょ？」
「これあくまで噂だけど好きらしいよ。蘭のこと♪」
「えええええ！！」
「誰ソレ…？」

おもしろくなさそうに尋ねるコナンの横で、園子はにやにやとした表情をくずさず興奮気味に答える。
「隣のクラスに留学してきた帰国子女よ！日本とイギリスのハーフで、日本語ペラペラだし、アメリカの大学を飛び級で卒業してるんだから！おかげで神君の周りには、気をひきたいメスたちが後をたたないのよねぇ。なんでも、日本の学校に行ったことがないらしくて、しばらくウチの学校にいるみたいよ。新一君ピーンチ」
「あ、そう」
「まさかぁ…。だって光琉君とは話とかするだけだし」
光琉クン？
なんで名前で呼んでんだよ…と心の中でぼやきながら、それを口に出せる状況にいない自分にかすかないらだちを覚えた。
「あらーそれにしてはずいぶん親しげよねー」
「別にそういうんじゃ…」
なんてゆーか、彼にあったことがあるような気がするから。
だけど思い出したくない。
かすかに残る残像は、血だまりの中で人が倒れている映像で。
そんな光景の中で、どうして彼に会ったことがあると自分に問い掛ければ頭痛が襲ってくるので、それ以上思い出すことができずにいる。

「またまたぁ、こないだめちゃめちゃ2人が親しそうに話してるの見たわよ。いいのしら～？旦那が留守だからって浮気しちゃっても…」
（オメーが言うか…？）
蘭の膝に座っているコナンは机に頬杖をつきながら、おもしろくなさそうに顔をそらす。
「コナン君？」
「うん？なに蘭姉ちゃん？」
「どーかしたの？」

「別にー？」
冷ややかな笑みを浮かべて、つとめて何も気にしてない様子でふるまう。
（この間人の女関係を疑ってたのは、どこの誰だっけ…）
って言ってやりたくてたまらない。
昔から蘭はそうなのだ。
男のことについて変なところで鈍感で、もう少し気をつけろよと思ったことなんて数え切れないほど。
だから、とても目が離せない。変なヤツにひっかかってなきゃいいけど。

「それに蘭との疑惑が噂されている人が転校生でもうひとり…」
「え？他にもいるの？」
「本堂君よ！！本堂君」
名前が出た途端、「ドジ」という2文字が最初に頭の中に浮かび、それから男らしからぬあの何ともいえない愛くるしい顔立ちの通称アンラッキーボーイを思い出した。
（……アイツか）
「あれはお父さんのファンなだけで、園子だってあの子の性格わかってるでしょ？」
「うーん、確かにほっとけないっていうか目が離せないってとこはあるのよねー…。っていうかあの子は生まれてくる性別を間違えたわね、絶対」
「でしょ？」
「でもこのまま神君と本堂君の噂が流れている中、工藤君が来たらきっとおもしろいことになるわよ！やん、もてる女は罪よねぇ」
（っつーか、本人ここにいるんだけど……）
「じゃ、そういうことだから蘭あんた修旅までにちゃんと治すこと！蘭がいなきゃ、思い出つくれないじゃん」
「うん！来てくれてありがと…園子」

「当たり前じゃない。じゃ、次修旅でね」
別れを告げ、園子は手をふると病室をあとにした。

――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
――――――――――――――――

園子が出ていき、コナンもそろそろ出ようとすると、蘭はそっとコナンを自分の方へ抱き寄せた。
「……蘭姉ちゃん？」
「ねぇ、コナン君……新一…来るって本当だと思う？」
言われた本人は少しだけ驚いた表情をした。
蘭…？
ああ…とコナンは切なそうな自嘲にも似た笑みを浮かべた。
どうしてオメーは、いつ帰ってくるかも分からない男を、そんなに待っていられるんだよ…。
蘭が抱き寄せてくれてよかったと思う。おかげで今の蘭の顔を見ないですむ……。
きっと胸が痛くてたまらないだろうから。
見ていたら絶対言えなかった。
「……来ると…いいね。新一兄ちゃん…」
それができないことは、本人が一番よく分かっている。
蘭はコナンを抱きしめたまま、そっとつぶやいた。
「うん…」
どこにいるかも分からない人なのに…会いたいとき会うことさえ叶わない人なのに――
どうしてこんなにも好きなんだろう。
近くに感じるのに、ねぇいつも姿だけがないの。
推理オタクの大バカ……嫌い、新一なんか。
お願い、帰ってきて……

『ｇｏｓｓｉｐ』（後書き）

第２話～。
前回書きすぎて…は／／／しまった…今回書くネタがない。
あ、５／５以前に評価してくださった方、すみません返事がかけなくて汗））でも全部読みました！めっちゃ嬉しかったでっす。
今日映画見にいってきやしたぜい。
おもしろかったーー。映画とか見ると自分の書いたもんがあんな風に動いたらいいなって思います。
ごめん、ありえないことといったー笑！！でもみんなの作品がそんな風にできたらきっと面白いだろうな♪
でもああやっぱキッドはかっこいい／／／／
全くもって意味フですね～あとがき。ではまた次回笑！

『riskyresurrection』

「なんじゃと？そんな噂がたっているのか？」
「ああ…」
蘭の病室を出て行ったあと、コナンはその足で博士が見舞いに来ているはずの灰原の病室へと向かった。
ドアをノックすると、博士が出てコナンを招きいれた。コナンはイスに座るとさきほどの園子の話を2人に聞かせる。
「誰かのふざけたイタズラか、もしくは…」
「組織の誰かがあなたをおびき寄せるために仕掛けた罠か…」
「あん？」
灰原は雑誌をめくりながら言う。
「だってそうでしょ？今あなたがいないことは誰だって知っているはず…そんな噂がたつのは不自然じゃない？」
「その可能性もあるけど、まだ組織の仕業と決まったわけじゃねーだろ…」
「どうかしら？私に内緒でこそこそ何かしているみたいだし。そのことと関係があるんじゃないの？」
（ハハ…やっぱりバレてら）
「新一君はもしかしてそれに行く気なのか？」
博士の問いにコナンは肩をすくめてみせる。
「組織の連中がうろついてるかも知れねーから行くわけないって言いてーとこだけど」
2人の視線を受け、凛とした青い瞳は冷たい輝きを放つ。
「ちょっとひっかかるところがあるからな…。それで、灰原オメーに頼みが…」
「解毒剤ならあげないわよ。組織がうろついているかもしれないのに、本当の姿をさらすなんて自殺行為だわ。それにあのクスリは試作品…完全でない薬の副作用がどれだけ危険か分かってる？あなた

の姿がもし組織の人間に見つかれば、どうなるかあなただって分かってるはずでしょ」
「ああ。だけど、そうも言っていられなくなっちまったからな…」
「どーいうこと？」
コナンはフロッピーを出すと、パソコンに入れる。
「灰原が病院に連れて行かれた後、暗号を解いてホープダイヤを見つけたのは知ってるよな？その時に、このフロッピーが入ってたんだ。紙とコイツと一緒に…」
「これって…」
――アメジストの者達に――
紙にはたった一言そう書かれていた。
そしてコナンがコイツといって手に持っているものは、どうやら円形の宝石のようだった。
「アメジストの者達？」
「ああ。アメジストのその名の由来を知ってるか？語源はギリシャ語。メタス（ｍｅｔｈｕｓ）という言葉を否定形にしたアメタストス（ａｍｅｔｈｓｔｏｓ）からきてんだ…。メタスの意味は酒に酔う…つまりそれを否定形にしたアメタストスの意味は酒に酔わないってこと。酒でオレたちがヤツラに連想するものといったら１つ」
「コードネーム…」
「ああ」
「それじゃ、あの今野総一郎って人…」
「そ、彼も組織の一人だったってことだ。あの難攻不落の館にこのフロッピーを隠したことと、この手紙の文書からしてあんまり組織のことはよく思ってなかったみてーだけど…」
「手紙？」
「博士電気を消してくれ」
博士がコナンの言う通り電気を消すと、照明が暗くなった。
「これ一見宝石に見えっけど、実はガラス製なんだ」
カーテンを閉めるとコナンは時計型ライトをつける。

ガラスに反射させれば、壁には文字が浮かび上がる。
そこにはこう書かれていた。

【開発し続けたこの実験を私は自分の罪を悔い封印することにした】
【彼らが何をしようとしているのか、私には分かってしまったのだ】
【ここに永久に封印することを私は望む】
【それが人間としての私の義務であり、また私が生きた証として残したいという願望でもある】
【今これを読む者すなわち組織と敵対するものだろう。彼らがこんなものを読むはずがない】
【そこで私は提案する。フロッピーの中に隠された本当の真意を見たいならば、示した暗号場所にフロッピーとこの宝石アメジストを持っていけ】
【場所は…大阪生物科学開発研究所】
【コードネーム…バッカス】

コナンがその名を呼んだ途端、持っていた雑誌を落とし、灰原の顔が驚愕の表情へと変わった。
「どうした？…灰原…？」
「そのコードネーム…私知ってる……」
「え…？」
「バッカスは…」
どうして？どうして、こんなところでこんな時に、この人の名前がでてくるの…。
「父の宮野厚司がマッドサイエンティストと呼ばれるきっかけになった研究の１つを行っていた人よ…」
「なんだとっ！？」
「バッカスがし続けてきた研究を、父が継いだと言えばわかりやすいかしら？」
「おい、じゃあオメーが組織で両親の研究を継いで開発していたこ

とを、バッカスからやっていたってことかよ！？」
「いいえ……私が、両親の研究を継いでやっていたものとバッカスの研究は関係ないわ」
「それじゃ、バッカスの研究を受けついだっていうオメーの両親は一体何の研究をしてたっていうんだ？」
その質問をされた灰原の目がやけに冷めていることが、コナンは気になった。
「……さあ……。そのことについて私はあまり聞かされてなかったから、詳しいことは分からないけど」
「それなら、哀くん。この暗証番号がなにか分からんかのォ？ワシらもいろいろ試してみたんだが、結局どれも違うらしくて開かんのじゃよ」
パソコンには暗証番号入力画面が開いていて、入力をしない限り、ページは開かないようだった。
灰原はしばらく考えていたが、やがて溜息まじりに言った。
「わからないわ。組織の人間は、結構何かになぞらえてつくるものが多いけど…検討もつかないわね」
コナンは、【大阪生物科学開発研究所】という文字に目を走らせる。
「でも、ここにコイツを持っていけば何か組織のてがかりがつかめるよな」
「待って！それで工藤新一になるつもり？どうかしてるわ。確かに、組織の手がかりは得られるかもしれないけど、リスクがありすぎる。それがあなたの手にあることで、組織の秘密を握ってる一方、あなたとあなたの周りの命は確実に危険にさらされるわよ。所持していた時点であなたの抹殺は絶対化するわ」
青い双眸が、力強い意思をおびてフロッピーを見つめている。
その鋭く強い眼差しが、灰原の瞳を見つめた。
息が出来ないと錯覚させられる。
薄暗い光の遮断された中で、それは確かな響きに変わる。

「……逃げて隠れていても解決はしねーよ。オレ達はもう…後には退けねーんだ……。先手を打たなきゃ、それこそいろんなもんを失っちまうだろ」
「あ……」
彼は自分の存在が…他人の存在が…枷(かせ)になっていることを誰より知っている。
重いけれど、とても大切な、はずせない枷(かせ)。

（守るために必死ね…お互い）
あなたはいつも…犠牲になろうとする私を生かす……。
それなら。
「白乾児(パイカル)と似た成分で茅台酒(マオタイ)っていうお酒があるわ…」
「え？」
「ああ、それなら知っとるぞ。確か白酒(パイチュウ)の一種だった気が…」
「そう…茅台酒は国酒とされている中国の高級なお酒よ…。アルコール度は55度。博士の言うとおり、白乾児と茅台酒は同じ白酒と呼ばれるお酒……。一時的にアポトーシスを抑えてテロメアーゼ活性を誘発するのに、最初に茅台酒を飲んだ後、白乾児の成分をもとにした解毒剤を飲めば媒体が強力になる分、長時間の持続が可能になるかも。まぁ試したことはないから、確かなことはいえないけどね…」
「……灰原の予想する有効時間は？」
灰原は5本の手を前に差し出した。
「予測では、最高で5日間。工藤君の場合一度元に戻っているから、もしかしたら薬が効きづらくなっているかもしれないけど…。無事に戻れる確率も半々と言ったところ…」
「ああ、十分だぜ…」
問題は、工藤新一になったときのこと。
考えているコナンの横で、灰原が横から口を出す。
「言っとくけど、その大阪にある生物科学研究所…確か3ヶ所ある

わよ」
「え…？」
３ヶ所？
地図を広げて、灰原がその３ヶ所に印を入れる。
「まずバッカスがいた第一研究所。それから２００ｍ先に第二研究所。それから先に第三研究所」
どれだ？…一番あやしいのは、バッカスのいた第一研究所だけど。暗号場所と書いてあるんだから、その前の文面に何か隠されたヒントがあるんじゃ…。
「アメジストというからには、宝石店の近くとかじゃないかの…」
博士が首をかしげる。
「いや、アメジストってだけで宝石店と結びつくのは安易すぎる…。それにそれを言うなら、アメジストの意味を含む…酒屋だっていいは…ず…？」
待てよ…
考え込むコナンに、灰原はガラス玉を手にして言った。
「それにバッカスはこの宝石のことをアメジストって呼んでるけど、実際はこの宝石はガラス製で透明…アメジストにしたいなら、紫に着色くらいしてもよさそうだけど」
「――――！？」
そうか――
コナンは机に飛び乗って、地図で確認する。
「どうしたんじゃ？新一君」
「わかった…おそらくバッカスが示している研究所は第３研究所だ」
「どうして？」
「ギリシャ神話さ。酒の神バッカスがアメシストという女性を虎に食べさせようとしたが、アメシストはその時透明な石になったんだ。その時、バッカスがそのことを悔いてぶどう酒をその宝石にたらしたことでアメジスト（紫水晶）になったって話だ。つまり、そのガラス製の宝石を組織のバッカスがアメジストと呼ぶってことは、ど

こかにそのガラスの宝石を着色できるぶどう酒があるはず。そのぶどう酒のある場所がバッカスの示す場所さ。…見てみろよ。そこに当てはまる場所が一件だけあるぜ」
指で示された研究所は第３研究所だった。
その隣にはワイン工場がある。

コナンは紙とフロッピーと宝石を持つと、
「んじゃオレ行くけど、なんかあったら言ってくれ」
「……ええ」
パタンとドアの閉まる音とともに、灰原は深い溜息をつきながら顔を腕の中にうずめた。
「ばか…」

工藤君…わかってる？あなたはいろいろな人に関わりすぎてしまっていることに……。
あなた１つの命が、関わった全ての命につながる。だから絶対にあなたは生き残らなければならないことを…。
それなのに彼はどんどん入ってはいけない禁足地に踏み入ろうとする。
彼が生き残っていられる確率が、目に見えて少なくなっていくことに、灰原は胸を痛めた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――

「博士、私って逃げてるかしら？」
「逃げてはおらんよ。哀くんは必死に戦ってるとワシは思ってるが

のォ」
「時々…夢に見るの…追われている夢。本当は毎日怖くてたまらない…。本当は犠牲になって、楽になりたい。そうすれば、誰か傷つくところを見なくて済むもの…」
「誰もが思うことじゃよ。哀くんは優しいから、特にそう思ってしまうんじゃろう。じゃが、本気で自分を犠牲に死のうなんて思わんことじゃ。ワシは哀くんを娘のように思っとる…あまりワシの寿命を縮めんどくれ。それに、子供たちも哀くんがいなくなったと聞けば、悲しむと思うがのォ」
「うん…」
あたしにはもったいないくらいの言葉。
その言葉に灰原は小さく微笑んだ。
安心があふれて、ゆっくりまぶたを閉じる。
ホントは生きたい。ずっとひとりきりだったあたしに、初めてできた切望する居場所だから。
だけどそれはあくまで願いであって、ここまで望むのはなんだかぜいたくなような気がした。
いつかは、別れの時がくるだろう。
赤みがかった髪を優しくさする手が差し伸べられる。
心地のいい、子守唄のような。
意識を夢にしずめる時に、灰原は心から思った。
この人たちだけは守りたい――
何に変えても。
初めて気づく自分の感情…教えてくれた大切な人たち。
誰かを失うのは、もうイヤだから。

『ｒｉｓｋｙ　ｒｅｓｕｒｒｅｃｔｉｏｎ　』（後書き）

こんにちは。
えー、第３話まで一気に投稿してるのでまた次回と打っときながらその２０分後には第３話の書き直しをしていたり。
眠いですねー。みなさんはＧＷどう過ごしたでしょうか？
あたしは遊びまくりました！終わってから、しまった勉強してねえと焦るバカひとり。あほだねー。
なんか書き直しているとめっちゃなつかしい。
あまりにも昔なことで、頭からすっぽり抜け落ちすぎて、本編について触れることさえできないでいるばか作者笑。
よく調べたなー、マオタイ。このお酒確かホントにあるんですよねえ。パイカルにたものないかなぁ？と思って調べたものだったと思います笑

ではまた４話で！！

『glimpse of secret love&friendship』

オリキャラ説明。
○中原美紗…芸名ＭＩＳＡ。歌手。
○滝川翔…新一の親友。趣味でバンドをやってる。位置はボーカル。
○香川葵依…親が外務省に勤めている。本人曰く男に興味が無い。

「新一…？新一ってば！？」
自分がぼーっとしていたことに気づき、慌てて蘭の声に応える。
「あ、ワリ。なに？」
「別にいーよーだ。せっかくの修学旅行も新一の頭の中っていえば、事件一筋なんでしょ…この推理オタク」
ちょっとした図星をさされた新一は少し首をかしげた後、あごに手をそえながら、
「いやいや探偵だからこそ、常に起こりうるべき変化に対する心構えを持って、対策を抱いてなければならないのだよ、お嬢さん」
「……はぁ？」
得意そうなこの笑いは決まってホームズを話す時だ。ピンときた蘭は呆れた顔で、新一の顔をのぞきこむ。
「……ホームズね？」
にやっと笑い「大正解」と新一はパチンと指を鳴らせてみせた。

「ねえ、新一？」
班で調べた大阪の資料を読みながら、蘭は首をかしげた。
「ん？」
新一はポッキーを口にくわえながら資料をのぞきこむ。
「この大坂城の名前って、大阪の地名からきてるんだよね？何で漢字が阪じゃなくて坂なんだろ？これ、印刷ミスかな？」
「いや…それであってんだよ。大阪って古くは鳥瑳箇（おさか）って呼ばれてたんだ。だけど、713年の風土記編纂の時に佳字二字を地名にする詔がでたことで、鳥瑳箇から小坂に変換されたんだけど、石山本願寺を立てた蓮如っていう僧が小よりも大がいいって言ってさ…大坂に名前を変えたってわけ」
「へぇー…」

口の中でポッキーを半分折ると、新一はその半分を蘭に渡す。
「だけど、大坂の坂の字は土に反(かえる)という意味があるから、それがイコール死につながり、縁起が悪いということになってさ、明治維新の後に大阪に改名されたんだよ。だから豊臣秀吉の建てた大坂城は未だにその地名のまま書かれてることが多いんだ」
「ふーん。新一ってすごいよね。なんでも知ってて」
「これでも探偵だからなー。探偵なんて知識がなきゃ始まらねーし。役に立たないと思うことでも、知ってるだけで世界が広がるぜ？蘭も行く前にそれぐらい調べるだろ？」
「新一じゃあるまいし、そんなとこまで調べないわよ…。あ、そうだ！わたし和葉ちゃんにメール送ったから、もしかしたら服部君と和葉ちゃんに会えるかもしれないよ」
「え？連絡したの？」
「うん。新一はしてないの？服部君に」
「や…まあ」
（やべー、大阪に行くこと服部に言ってねーけど…まいっか。アイツに事情話すと絶対ついてきそうだし……）
できるなら、会いたくないのだが。
でも蘭がメールしたってことは……。
来るよなー絶対。
（どうすっかな…）

「工藤工藤…ちょっと」
「あん？」
隣で数人の男子がかたまって「ちょっとこっちへ来い」と手招きをしている。あきらかにその顔は何か悪巧みを企んでいる顔だ。新一はまゆをひそめながらも仕方なく、補助席を出してそのグループに入る。
「なんだよ」
「お前、毛利とどうなの最近？」

なるほど。やっぱりそのネタでくるか。
「別に何も？」
「オイオイオイオイ…ちょっと待てよ、お前あれだけ一緒にいて何にもねーの？つきあってんだろ？」
「つきあってねーよ」
「じゃ、俺毛利にモーションかけちゃおっかな～」
会沢のからかいの言葉に、周囲の男子がのってくる。
「おーおー、ユーいっちゃう？で、散っちゃう？」
「工藤ピンチです！早いとこ既成事実つくっちゃえよ～」
ゲラゲラと笑う男子一同。
「オメーらなぁ…！」

その時じゃれあっている2人の後ろから、ひょこっと中原美紗が顔を出す。
モデルから歌手デビューを果たす実力で、人気もそこそこあるが今はまだ発展途上といったふう。
「久しぶりだねぇ、シン。相変わらず歌へたー？ちょっとはうまくなったー？」
「ハハ…オメーも相変わらずじゃねーか」
てゆーかむしろ口が悪くなった気が…。
顔はいいのに、ずばずばと言ってくるのがミサだ。それは、新一にだけかもしれないが。
「ダメだって。シンは筋金入りの音痴じゃん」
美紗の隣に座る滝川翔（タキガワショウ）は携帯をもって、笑いながら声をかける。
「タキ、メール誰としてんだ？」
「バンドの仲間。ってか、みやげばっか催促してくるんだけどー」
「なぁところでさァ、修旅で誰か告るヤツいる？」
中西が顔をだし、周りの男に問い掛ける。
「帝丹の恒例行事だしねーーー。がんばれ男の子。ミサは、いつで

もＯＫよん」
ウインクして茶化しているが、男子たちは半分本気にとっている。
「バカ？ちゃんと座れってお前さー」
滝川が美紗の手を引いて、シートに座らせる。
その光景をちらっと頬杖をつきながら見ていた新一は、
（あーあ。バカ…アイツ絶対怒ったな今ので）

修学旅行では告白が帝丹高校で恒例化している。
いつから始まったのか、修学旅行でネクタイを渡して告白し、両思いだったら、告白された者は自分のネクタイを相手に渡すのが、帝丹のジンクスになっていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー

水色の双眸に、象牙色の肌。漆黒の髪を巻いている彼女の名は、香川葵依。
園子の席に座る葵依は、窓の外を眺めている。
「葵依…あんたなんでもてるのに、男作らないのよ？その顔でもったいないじゃない」
園子と葵依と蘭は、３人でＵＮＯをしていた。
園子が、Ｓｋｉｐをだして蘭がとばされる。
「男に興味ないもの。作る必要を感じない」
葵依はＤｒａｗｔｗｏをだす。
「でも葵依ちゃん、好きな人とかいないの？あ、園子ずるーい」
「園子様の意地をなめないでくれる？っていうか、蘭今回は絶対負かすわ」
園子がＤｒａｗｔｗｏをもっていたので、蘭はしかたなくカードを４枚ひく。

全体的に色素が薄く、それに大人びた雰囲気を出すものだから、そこに光があるように錯覚さえさせる彼女。
「……大切な人はいたけど、とられちゃったから…。探すの…なにがあっても…」
「……え？葵依の好きな人ってもしかして行方不明？」
葵依はその時笑っただけで何も答えなかった。
「あ、ごめん」
「もともと死んだと聞かされていた。生きてるみたいだけど」
切なく笑う水色の瞳が誰かと重なって、蘭は少し戸惑う。
「見つかるといいね、その人」
「そうそう！私らになんかできることあったら、協力するからさ！」
その時の蘭に彼女の好きな人など知る術もなかった。
だけど、かけられた蘭と園子の言葉に、彼女が少しだけ微笑んだのが蘭には見えた。

『ｇｌｉｍｐｓｅ　ｏｆ　ｓｅｃｒｅｔ　ｌｏｖｅ&ｆｒｉｅｎｄｓｈｉｐ』

こんばんわの時間に書いております。蒼羽レイです。

あ、そうだ！コナン専の新サイト開設記念に、書こうかなって思っている話があるんです。
青ダイヤ。前作の番外編。前にもちょこっとどっかで言った事あるような気ーします…。でもめんどくさいのと忙しいのとでま、いっかーと思っていたお話笑。ずっともう１年くらい前に考えた話か…書くまいと思っていたお話ですが、記念に投稿しようと思っとります！！

さてこのオリキャラズ。どーしてくれよう。なつかしすぎてオメーら性格どんなだっけ？って思いながら打ち打ち。
頼むから！頼むから！もうこれ以上出てきてくれるな、とキャラを増やすなと言いたいですね、はい。書くのはあたしだっつーにね。
最近オリジナルも書きたくなってきた今日この頃。
１週間の中でもう１日増やしたい。あー増やしたい。週８日♪そしたら私は、その増えた１日を「ｌｉｋｅ　ｄａｙ」と名づけ、好きなことをする日にしよう。そうしよう笑
ではまた次回！

『Boys & Girls』

1日目の見学箇所を一通り見終わった新一たちは、そのままホテルへと到着した。ホテルというには、あちこちに傷や汚れが目立つが、生徒たちはそんなことはおかまいなしにはしゃぎまわる。
どちらかといえば、高級なホテルにとまって、厳粛に過ごすより、多少さびれていたほうが騒げるから彼ら彼女にはいいのかもしれない。

6人部屋の部屋にやっと案内され、くたくたになった体を、畳の上に放りなげる。
「あ〜…疲れた」
「おい工藤、6時からメシらしいぜ」
「マジ？」
同室の中道がカバンを置きながらそう言う。
時計で確認すればあと15分しかない。
疲れきって動かない体を強引に動かしながら、新一はしぶしぶ立ち上がった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

夕食の用意された食堂にみんなで向かう途中で、食堂にいる蘭の姿が見える。
横にいるあの男は…
「あー！！工藤、アイツだよアイツ！！神光琉」
会沢が指をさす人物を見て、なるほどねと思う。
周りの女子たちが、彼のことを見つめながらひそひそ黄色い声をあ

げていた。
確かに、ハーフだからか顔つきがとても整っている。髪はブロンドだが、顔はどちらかというと日系に近い。
愛想よく笑みを返すその仕草に、新一はまゆをひそめる。
彼の態度は、行動振る舞い全て他人がどう自分を思うかが分かっているような感じだ。
（ま、あれじゃ、男には嫌われるな…）
今、新一の目の前での蘭の接し方も、ある意味完璧。
「―ったく」
新一はあくびをしながら、蘭と神のそばを横切った。
その時に、蘭の腕をぐいっと新一は引く。
「え、新一！？」
驚いている蘭は何か言おうとしているが、その言葉を待たずに新一は一言言いはなった。
「夕食行くぜ」
「えっ…ちょっ」
有無を言わせない行動に、蘭はどうしていいのかわからない。だけど、なんとなく黙ってついてくべきなんだろうとそんなことをぼんやりと感じた。

「さっすがね。やっぱり違うわ…好きな人取られているのを黙ってみている男子どもとは」
その様子を見ていた園子は横目でちらりと、会沢たちに呟いた。
「しょうがねぇだろ」と新一と一緒に来ていた5人が、苦虫をかみつぶしたような表情をしている。
その中に、彼が原因で彼女とけんかした者もいるのだ。
「まったく、情けないったら」
蘭を横からさらうようにして引き離した新一に、神はおもしろいものでも見るように、「へー」と含んだ笑みを浮かべる。

「工藤…新一君？はじめまして、名探偵さん」
「はじめまして。もうすぐ夕食ですから、また会えたらゆっくり」
蘭にはわかる。にっこりと笑っているが、明らかに新一は不機嫌だ。
その新一の態度をこれまた笑みで返す神もなんだかこわい。
「そんなに怒んないでよ。彼女にまだ手は出してないからさ」
（まだ？）
「すごいね高校生なのに名探偵だ。いくつも事件を解決してるし。だけど最近君の噂を聞かないんだよねー、どうしたのー？」
（こいつなんかしってる…？）
思わせるような言葉の言い回し。
それとも、気にしすぎだろうか。
「こちらにもいろいろと事情があるんで…。じゃ友達がまっているので、オレたちはこれで」
そう言って新一は、蘭を連れたままみんなのもとへと向かう。
その2人の背中をくすっと笑いながら、
「逃げられちゃった」
その時、同じクラスの女の子が顔を赤くしながら、一緒に食事しませんか？と誘ってくる。
神は彼女に極上の笑みを向ける。
「いいよ」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――

「蘭、オメーアイツといつ知り合った？」
「うーん…転校してきたときに話しかけられてからだったと思うけど」
「アイツとあんま関わんねーほうがいいぜ」
「ねえねえそれってもしかしてやきもち？」

園子が目を輝かせて聞いてくるので、新一は反射的に「んなわけねーだろ」と答えてしまう。
「でも光琉君、そんなに悪い人じゃないよ？ちょっと女たらしかもしれないけど、それが彼の性格ってゆーか…勉強だって教えてくれるし、結構優しいし」
神をかばう蘭に、新一は肩をすくめる。
悪い人じゃないと信じている蘭にこれ以上、関わるのをやめろなんていうのは何だか気がひけてしまう。
「蘭、旦那も気が気じゃないのよ。他の男と話してるなんて妬けるわよねぇ。ま、でも性格はおいといてもアレはでも正直やばいわねえ」
ちらっと神を目で追いながら、園子はぼそっと呟く。
「園子、オメーもアイツにせまられたろ…」
「え、どうしてわかるの！？」
「ハハ…」
（顔みりゃ一目瞭然じゃねーか）
「でも私は断然真さんよ！！真さん一筋！！」
「そういえば園子、真さんどうしてる？」
「え？あ、うん元気にしてるみたいー」
あははと笑ってごまかす園子の仕草がぎこちなくて、蘭は「？」と違和感を感じた。

その時、蘭の隣のイスが後ろに引かれる。
食事のお盆をもった本堂が、どさっとイスへと腰掛けた。
「でも、ずるいですよね。容姿端麗、頭脳明晰…まさに神様の寵愛を一身に受けてるような人です。僕にはとてもかなわないばかりか、まるでその逆で…」
といってるそばから、はァと溜息をこぼした手をひっこめた拍子に、コップをこぼしてしまう。
「あァーー！？ほら、見たでしょ？やっぱり僕は落ちこぼれ街道ま

っしぐらなんです」
その手の話を聞き飽きている会沢たちは食事中にうぜぇと、あからさまに顔を不機嫌にした。
中道は溜息をつき、
「ってーかさ、何で本堂お前がいんの？」
「えっいちゃいけませんでした？でも僕は、名探偵である工藤君と話がしたくて。帝丹の誇る名探偵と言われ、警察も一目置いているっていうじゃありませんか！お会いできて光栄ですー工藤君」
本堂は本当に嬉しそうに、目を輝かせている。
「……」
そして新一をじっと見つめていた本堂が妙に、真剣な面持ちをする。
「でも、思うんですが僕はどちらかというと毛利探偵の家にいるあのちっさい子供に似てると思うんですよね。名前は確か…コナン君…でしたっけ？蘭さん」
その瞬間ぎくりっとはしを止めた。
（やべっ）
話の展開がまずい方向に。
「そう？でもコナン君って、新一と遠い親戚なのよ…だからじゃない？そうだったよね？新一」
「あ、ああ。うん、そうそう」
「コナンって毛利のところで預かってるって言う？」
「うん。小学生の割りにクールなんだけど、でもとってもかわいいよ」
「ま、私に言わせればただのナマガキだけどね」
（ハハ…どっちが）
ふと視線をそらせば、葵依と目があう。
彼女は前から、新一のことを見ていたように感情の宿らない澄んだ目で新一を見つめていた。
しかし新一が葵依の視線に気づいたのが分かると、１つまばたきをして目をそらしてしまう。

「……？」

ーーー

「実は真さんがね…大阪に来てるんだ。大阪の後また外国に発っちゃうみたいでさ…だから少しでもいいから一緒にいたいなって…ごめん蘭！」
「うん…いいよ。いってらっしゃい」
「え？」
あまりにも早い返答に、園子はぼうぜんとする。
真に会うためとはいえ、一緒にまわろうという蘭との約束をやぶってしまうことに園子はうしろめたさをずっと感じていたのだ。
そんな園子の気持ちが分かったのか、蘭は微笑みながら、
「だって園子、京極さんとずっと会ってないんでしょ？せっかく会える機会を逃しちゃだめだよ。わたしのことはいいから、会いにいっておいで」
「蘭、ありがとう」
抱きつく園子に、もう単純なんだからと呟きながら、抱きしめて触れる肌に友情を感じる。
だって新一と蘭のことを一番思ってくれているのは園子だ。
離れ離れでいることがどれだけつらいかが分かるから、この機会を失って欲しくない。
園子にはいつも笑っていてほしい。

抱きついた園子の視線の先に、ふと…蘭たちとは少し離れた距離で、木の枝の上に誰かが座っているのが見えた。
月が煌々と輝く光を浴びて、なんとも幻想的に。
ほんのりと明るく照らす月光の下で、金色の髪が淡い輝きを放つ。
彼は静かに目をとじて居心地よさそうにしていた。
「あれ？あそこにいるのってもしかして神くんじゃない？」
園子の声が届いたのか、彼は瞳を開けて、ゆっくりとした動作でこちらを見た。
微笑んでいるのが分かる。彼はそっと人差し指を口にもっていって、

その後手招きをした。
蘭と園子が近くまでやってくると、彼は枝から飛び降りた。
「夜の散歩？」
「は、はい！」
「奇遇だねぇ。僕も」
とろけそうな微笑みを浮かべられて、園子の目はハートになっている。
さっきまでの彼女はどこへ行ったやら…。でもこれが園子よねと蘭は苦笑する。
「せっかく偶然出会ったんだし、いいもの見せてあげる」
みてみと奥をのぞくと、木と木の間に花火があがっていた。
2人が嬉しそうに見ているのを、神はやんわりと微笑んで見守る。
「すごい、きれい」
「喜んでもらえて嬉しいよ。でも戻らないと、夜風は体によくないから。風邪をひかないうちにもどったほうがいいかなー」
「え、でも…」
園子がしぶるので、くすっと笑いすきだらけの園子の手をとって口づける。
「早く戻らないと、知らないよー。僕手はやいし？」
夜だから分からないが、園子の顔は赤くなってるに違いない。
それがわかっているのか神は今度は「戻れよ」と一言だけ言って行こうとする。
その様子を隣で見た蘭は、やっぱり新一の言ってた通りかもと思う。
でも悪い人…じゃない…よね？
彼と出会ってから蘭の頭に残像のようにちらつく映像。
血だまりの死体だけが断片的に映し出される。
どうしてそんなところで彼と出会ったことが？
ふと彼と目が合う。
「あの…わたし、光琉君とやっぱりどこかで会ったこと…」
「ないよ。でももし出会っていて、僕たちが再会したのだとしたら

運命的だって思わない？」
口説いているのか、本気でいってるのかいまいちわからない。
（やっぱり勘違いなのかな）
そうなのかも…。
そもそも蘭には、見覚えがないのだ。記憶にある場所に行ったことも、彼と会った記憶も。
でもそれなら、白昼夢のようにでて来るこの記憶はなんなのだろう。
そう思えば、また頭の中で映像がうつしだされる。
「あ…」
今度は前より鮮明だ。
神は、そんな蘭の様子を黙ってみている。
血だまりの死体……誰かが立ってて……ナイフを持って…それから…
そのナイフがピシャンっと赤い雫を落とし、落とすたびに蘭の頭にはずきっと痛みが走る。
それが表情にでたのか、目の前で金髪が揺れた。
彼は蘭の苦しんでる様子に気づいたのか、そっと頭に触れてキスを落とした。
「なっ――！？」
「んー？キレイな髪だなあって」
記憶もなにも吹っ飛んだ。
けれどにこにこ笑う彼の狙いは、彼女の気を散らすことだということに、蘭は気づいていない。
すっと神は蘭の頭に可愛らしいピンクの花をさしてやる。
「よく眠れるように…。つらそうだったよ。蘭…思い出してつらいことはね…忘れていたほうが楽なときもあるんだよ」
その時、蘭の耳に「思い出さないでくれ」と呟くようにして届いた声がやけに苦しく切なく聞こえた。
「ひか…」
「部屋何号室ー？送ってく」
蘭の言葉をさえぎって、神は質問をする。

さっきとは違ういつもの態度で接してくるので、蘭は余計さっき言った彼の言葉の意味が気になってしまった。

ーーー

――――――

ウノに燃えている男子一同。
しかし、新一はその熱き戦いには参加せず、ひたすらノートパソコンをいじっている。
「おい、工藤〜お前こんなとこにそんなもん持ってくるか？普通」
「いろいろやることがあんだよ」
カタカタと手慣れた動作でキーボードをたたいていく。
入っているフロッピーは、こないだの洋館で手に入れたもの。
いろいろ試し、何回か入力してみるがでてくるのはエラーの表示。
（くそ…やっぱ研究所に行って暗証番号を手に入れるしかねーか）
コンコンとノックされた音に気づいて、新一はウノに燃えている人たちの代わりに出る。
「はい」
そこにいる人物を見ると新一は面食らう。
「……マジかよ」
「遊びにきちゃった」
（……オイ。ダメじゃねーかやっぱ）
中西たちの様子を見て、肩をすくめ「ま、いっか」と新一は中へと招き入れる。
「入れよ」
「あっれ〜、毛利に中原じゃん」
「遊びにきたって。会沢、飲みもんとって」
「さんきゅ」と会沢から新一はジュースをもらう。
「ねーねーミサもトランプいれてー」
美紗がそういっていれてもらう。
「飲む？」

新一が缶ジュースを蘭に差し出す。
「うん。ありがと。男子のほう楽しそうだね」
「徹夜するみてーだぜ」
楽しそうといっても実際は好き放題やっているだけだが…。トランプしたり、麻雀したり、携帯いじっていたり…基本的に自分のやりたいことをやっているって感じの方が強い。
「どーせミサに頼まれてついてきたんだろ？」
「うん。新一たちの部屋に行きたいって」
「ま、たぶん滝川に会いにきたんだと思うぜ。ミサと滝川ってつきあってっから」
「ええ！？うそ…」
「知らないのもむりないさ。あの2人…立場上付き合ってるのをみんなに隠してるからな…」
「何で新一は知ってるの？」
「ミサがストーカーに困ってるってオレに相談してきた時に聞いたんだよ…。ま、うすうす勘づいてはいたけどな」
「へぇ」と蘭は納得する一方で、なんだか寂寥感を覚える。
美紗と滝川は、同じ場所にいるのに周りの目があるときは一定の線を引いて接しなくてはならないのだ。
それは蘭たちも同じこと。
きっと修学旅行が終われば、新一はまた事件で行ってしまうだろう。
その時たまらなく寂しくなるに違いない。
「新一、大切にしたいものほど大切にするのってむずかしいよね…」
「そーだな…」

その時、コンコンと部屋をノックする音が聞こえた。
一瞬部屋に緊張が走る。
会沢が「隠せ！」と小声で叫び、そこにいた者たちは何とも俊敏な手さばきで、とりあえず先生に見つかってはやばいものから隠していく。

滝川は美紗の腕をひっぱる。
「タキ…？」
「しっ！」
滝川は、美紗を連れてベランダへと出る。
「まって、タキ！蘭が…」
「静かにしろって！毛利はシンがいるから大丈夫。それよりさァ…お前なんなの？」
「は？」
「男に色目使いすぎ」
「何いってるの？使ってないじゃん！」
「あっそ」
そう言い切ると、いきなり美紗の口を自分の口でふさぐ。
「ちょ…っまっ」
怒ってるー。
半ば強引のキスの後、美紗はこぶしをにぎりしめる。
「どーゆー状況かわかってやってんのー！！」
「オレとお前2人きり」
「バッカじゃないの」
ベランダから出ようとすれば、止められる。
「待て待て待て。まだムリ」
「さいてー」
その言葉にはさすがにカチンときて、滝川は美紗を壁に押さえつける。
いたっと小さく呟いた美紗を無視し、滝川は言う。
「言えよ」
「なにを？」
まっすぐに見つめてくる彼女の瞳がかすかに怯えている。
「お前、今日何人に告られた？」
「……4人」
「はぁ？もうホントふざけんなだしー」

滝川から目線をそらし、うつむく。
「ごめんなさい」
美紗が上目づかいで見上げてくる一方、滝川は大きな溜息をつく。
見つめあった数秒後。
今度は軽く2人はキスをした。

「新一…」
きょろきょろと辺りを見回してどこか隠れそうな場所を探す。
新一はしゃーねーなとぐいっと蘭の手をひっぱる。
「きゃっ！？」
ドサっとベッドの上に倒れこむ。すると新一は毛布を取って蘭と自分の顔を毛布で隠した。
「新…」
「しっ！」と人差し指を添えて外の音を聞き取っている様子の平静な新一とくらべ、蘭はドキドキしっぱなしであった。

その時、先生が部屋に入ってくる。
「おい！今一体何時だと思ってるんだ！！消灯時間はとっくに過ぎてるんだぞ！！」
どうやら声が外にまで漏れていたらしい。
男子たちは曖昧な笑みを浮かべながら、「すいません」と謝っていた。
先生は疑わしく部屋を見回している。
お願いだから、早く行って。
さっきから、見つかるかもしれないのと新一と一緒にいることの緊張で心臓がドキドキしていた。
こんなところ先生に見つかったら絶対まずい。まずいどころではない。
ぎゅっと強く目をつむる蘭の耳に、落ち着かせるように「大丈夫だ

って」という言葉が落とされた。
そのとき「早く寝ろ」という先生の声とともに、パタンとしまるドアの音が聞こえ、新一と蘭はやっと毛布から出てこられた。
新一と目が合って、蘭は照れ隠しに反射的にそらしてしまう。

「蘭よかった！見つからなくて」
美紗がかけよってきて、蘭はほっとする。
「うん。でもそろそろ戻ろ。これ以上いたらきっと本当に見つかっちゃうよ？じゃ、おじゃましました。おやすみなさい」
新一の顔を見おうともせず一気にそれだけ言って、美紗の手をひっぱっていく。
美紗は滝川に軽くウインクをして、２人は部屋を出て行った。

「く、ど、お～♪お前、毛利に何したんだよ？」
会沢が肘でつつく。
「別に何もしてねーっての」
「でも様子変だったけどな」
「で？中原と一緒にいて何もなかったのかー？滝川は」
「あるわけねーじゃん。俺あいつのこと好きじゃねーし」
さらりと言ってしまう滝川に、新一は肩をすくめた。

――――――

服部邸で夕飯を食べていた和葉が、服部に言う。
「ほォ、工藤と姉ちゃんが来てるんか……。そりゃ…」
あれ？ちょっと待て。今一体なんて？
……工藤？？？？
「和葉、お前今なんて言うた？もういっぺん言ってみぃ！」
「だから、何か工藤君来てるらしいねん。私、工藤君とそんな会ったことないし、会ってみたいわァ」
（はぁ？……わけわからん。なんで工藤がここにおんねん？）
もとの姿に戻った？
はしをくわえながら、首をかしげる。
１つだけわかることは。
（アイツ、オレに何も言わんと、また何かおっぱじめる気やな…）
自分に何もしらせてこない。
コナンから新一にもどったということは、何か理由があるはずだ。
（ま、言わんなら言わせるまでやけど）
そんなことを頭にめぐらせながら、ピンといいことを思いついた。
にやっと不敵に笑みながら、平次は和葉に言った。
「和葉、そのスケジュールちょー見せてみ」

『Ｂｏｙｓ　＆　Ｇｉｒｌｓ』（後書き）

こんにちは。蒼羽　レイです。
やっと全部更新し終わった。疲れた。長いよー…もう。誰だあー？
書いたの笑：さてここまでは、すでに読んでくださった方もいること
と思います。次回から、ホントに続編を投稿しますので、お楽し
みに。
いつもあとがきを書くとき、究極に眠いときでして、あとから読み
返すとなんじゃこりゃあって思います。特に最近。わーうざいこと
かいてんなぁと自分で思ったり。眠くてもう思うままに書いている
からか…。
あたしは大阪に一度も行ったことないっちゅーに、大阪の話を書こ
うと無謀なことに挑戦中。大阪弁まったくわかりません！フィーリ
ングで書いています！ので、そうゆうものだとして読んでください
笑！！
ではまた次回。

『ｃｒｏｓｓ』

ピシャンと鮮血に染まる世界。
ああ、またこの夢……
音の聞こえない…無音の世界。
霞がかった世界に、誰かがいる。あれは……

――――らん…！！

ナイフを持つ、男の人と……小さな女の子。
顔がよく見えない。
――――あなたたちは誰？ここはどこ？

「蘭！！」
はっと目を覚ましたとき、園子が心配そうに顔をのぞきこんでいた。
「ちょっと大丈夫？さっきからずっとうなされてたわよ」
ほんとだ。着ていたはジャージに冷や汗がかいていた。
蘭はうつろな意識で、「うん」とそれだけ園子に告げる。
「ほんとに大丈夫？顔色よくないけど」
最近よく見る夢。
思い出したくないが、日に日に鮮明になってきている。
この夢を見る度、さいなまれる頭痛に頭を抱えながら、蘭は園子に心配させまいと笑顔を向けた。
「大丈夫！ちょっと夢見が悪かっただけ」
「そう？ならいいんだけどさ」
時計を確認しつつ、蘭は強引に自分の意識を現実にひきよせた。

――――――

――――――――――――――――――――――――――――

朝食のバイキングにくれば、もう生徒のほとんどは席について各自朝食をとっていた。
しかし新一の姿がみえない。
一緒にいた滝川たちの席のテーブルにお盆を置いて、蘭は尋ねてみる。
「ねえ、翔君…新一しらない？」
「ああ、シンなら、なんか用があるってさ。さきメシ食ってて言ってたから置いてきた」
「そうなんだー」
「そんなに落ちこまなくても、後でいくらでも会えるって」
園子が蘭の隣の席に、朝食をのせたお盆を置く。
「べ、別に落ち込んでなんか」
新一はいつだっていないのだ。これぐらいで落ち込むはずなんてない――
けれど気持ちは正直で、ほんとはちょっと淋しく感じていることに蘭だって気づいていた。
しかしそれは昨日見た夢のせいだと思い込もう。

「あれー？蘭さん、工藤君と一緒じゃないんですか？」
本堂がやってきてそう言うと蘭の目の前に座る。新一と一緒でないことに妙に嬉しそうである。
（で、蘭の目の前に座んのかしら…）
園子はずずっと飲みきってしまっているジュースをストローでさらに吸いながら、頬杖をついて様子をうかがう。
しかし平静を装って聞き耳をたてているのは、園子だけでなく、その場にいる全員ご飯を食べている風を装いながら、耳は一言も逃すまいとしている。
こんな面白い光景を逃してたまるかという雰囲気だ。

蘭を熱心に見つめる本堂ときたら、そりゃあもう。
そのくせ、何かを言おうと口をもごもごさせているものだから、園子をはじめ、一緒に朝食をとっていたメンバーは、じれったくて何だかこっちが恥ずかしい。
「ったく男だろーが。言うなら早く言えよ…」
会沢がそう呟く。
「バカ」
中道が小突く。
すると、本堂がバッと顔をあげたので、全員はおっ？と視線を彼に移す。
「あの、えっと…蘭さん。その…朝食の後、少し時間空いてますか？」
（（（ほーら、きたぞ…））））

「え、うん」
顔を真っ赤にして言う本堂を不思議そうに見つめ、蘭は首をかしげる。
「でも、どうして？」と蘭が問おうとした時、本堂はご飯を勢いよくかきこんで、席をたった。
「ご、ごひひょーはまでひた。でふぁ、またあふぉ…うぐっ」
本堂の顔がみるみる真っ青になっていく。
ドンドンっと胸をたたいている様子からして、どうやらのどに食べ物をつかえたらしかった。
本堂にとっては生きるか死ぬかの一大事であるかもしれないが、周りの人間はそれだけつめこめばねぇとあきれた様子で本堂を見る。
仕方なく会沢が水を差し出してやると、本堂は一気にその水を流し込んだ。
「はァはァ。ひどいです…ただ見てないで、助けてくれたっていいじゃないですか。ごほっ」
「大丈夫だよ、お前は。ついてはねーが、その運の悪さで死ぬよう

なことはねーって」
「そうなんですよねぇ…僕ってば運は悪いのに、その運の悪さで死ぬようなことは無いんですよ。もう、運が悪いのか、いいのかわかりません…。なんで僕ってばこうなんだろ」
またいつものが始まりそうな予感のした園子は、釘をさす。
「あーはいはい。それより、早く行かないと早く食べた意味がなくなっちゃうわよ」
「あ、そう！そうでした。では、またあとで蘭さん」

ーーー

対してあるってことよー」
（新一がわたしに対して思う気持ち…？）
蘭は首をかしげて一番先に思い立つことを言ってみる。
「…幼なじみの心とか？」
こればっかりは、全員が何らかのすべりを見せたのだった。

――――――

「あ、あの？」
「夢、見せてあげよっかー…？」
髪を撫で、そっと頭にキスを落とす。
髪を右手でもてあそんでる一方、左手では床に落とされたサイフの中から1枚のルームキーのカードを彼はそっと抜き取った。
カードを指にはさんで、彼女に気づかれないように、手を彼女の背中にまわす。
ぼうっと見惚れるようにして見つめてくる彼女に、「ん？」と彼は極上の笑みで返す。
「キスして…」
「教えてほしいことに答えてくれたらね」
彼女もきっと、遊びだということはわかっているだろう。
彼は彼女の耳にそっとささやく。
「ねぇ……工藤新一ってどんな人？」
――――――

（……まいったな）
自分の推理が少しずつつながっていく。
あってるとすれば、それは最悪。
「そろそろ限界かもな…」
蘭と…決別をしなくては。
自分の周りに安全な場所がなくなる前に……
心をそのまま映し出したように、澄んだ青い瞳が揺らぐ。
自分を偽ってどれだけ彼女を傷つけてきただろう。
「わかってるさ…」
感情的にならず、冷静に考えれば答えなんてきまってる。
……離れればいい。
青い双眸に意思が宿る。
新一のホントの気持ちを知ったら、こういう態度をとる自分に蘭はめちゃくちゃ怒るだろうなと思って少し苦笑する。
（…どんなことがおこっても、オメーは絶対守るから蘭…）
だから、ごめんな。
うつむいていた頭をおこし、前をみすえる。
その双眸には何かを決意したような光が宿っていた。

――――――

「どーしたの？本堂君。こんなところに呼び出して」
蘭が今いる所は、昨日の夜、園子と抜け出した庭園だった。
本堂はさっきから、ずっと落ち着かない雰囲気でそわそわしている。
手を後ろに隠し、うつむいて、ずっと一人で何事かを言っている。
「このままでは、後悔…あーでも、蘭さんには工藤君が…。でもでも！もしかしたら…。ってゆーか、ここまできたんです！本堂瑛祐…ここは男らしく…」
と言いながら、ちらりと蘭を見る。
「あ、あの…これ受け取ってもらえますか？」
「なーに？」
後ろにあった手が、蘭の前に差し出される。
握られている手の中には、緑のネクタイ。
「……あの……好きです」
…はい？と一瞬思考が飛んだ。
園子が前に、本堂は蘭に気があるのだと言っていた。
それに朝食の席での、みんなの態度が妙に不自然で。
（も、もしかして…みんな気づいてたの！？）
「あの…蘭さん？」
「あ、はい！…じゃなくて…えっと…」
ちょっとドジで、でもいつも一生懸命で元気で面白い人…。
だけど…と蘭は目を閉じる。
「ごめんね、本堂君。私好きな人いるから、そのネクタイは受け取れません」
「そう…ですよね！蘭さんにはやっぱり工藤君がいますし。僕なんかドジばっかりで…かっこよくないし」
「本堂君わたしね、本堂君のことは友達として好きだし、かっこよくないからとかドジだからダメとかそういうんじゃないの。わたしは新一が好きだから」
（僕、蘭さんのこういう所が好きだなぁ）

一途で、優しい。
「蘭さんは、工藤君のどこが好きなんですか？」
蘭はその質問にクスッと笑った。
「……なんでだろ？頭の中は事件のことばっかだし、人のこと置いてけぼりにするし、かっこつけで自己虫で、ホーントしょうがないヤツなのにね…。でもどんなにつらくても、忘れたくないって思えるくらい大切なの」
新一は強くて優しい一方で冷たくて哀しい人だと蘭は思う。
真実を思い求めることに一途な故に、時にその真実に隠された闇まで背負うから、自分もその傷を負ってしまう。
新一のそばにいることで、何か１つでも支えになれればいいのに。
まっすぐな眼差しでそういいきる蘭に、本堂は憧れさえ感じた。
彼女にここまで必要とされている人だ。
それはきっと彼も同じくらい彼女を必要として、大切にしていなければ言えない言葉。
「……幸せになってください。蘭さんの大切に思っているその人と」
その言葉に笑顔を向ける蘭の顔が、本堂にはなぜだか寂しそうに見えた。

――――――

最初から玉砕だとわかってて告白するヤツなんて誰もいない。
「心中お察し。ご愁傷様」
チーンとみんなは同情の眼差しで、合掌するのだった。

『ｃｒｏｓｓ』（後書き）

蒼羽　レイです。
えー、一部の人にはとってもお待たせしたことと思います。おまたせしました６話、続編です！
で、ここで１つことわり。レイは、コミックス派なので今現在５３巻までしか読んでません。ので！本堂君の本編のキャラ設定はオバカでドジのままいかせてもらいますー笑：どういう設定なんだよってね汗）））
次回もそんなに期間おかずに投稿できればいいですけど／／／ってゆーかしろよって感じですよねー。時間があればいくらでもしたい勢い…。
ではできるだけがんばります！また次回！

『Good－bye because of Love』

大阪城公園は、桜の名所。もともと軍用地ではあったが、今は広大な公園で緑であふれていた。
青屋門で生徒を整列させるため先生が声をあげる。
「それじゃー1時まで自由時間にするが、昼食代は各自まわっていると思うから、昼食は食べてくるように！大阪城公園を出ても構わないが、2時までにはここに戻ってくること…道が分からんヤツは1人で行動しないで団体行動にしろー。他の一般の方の迷惑になるようなことはしないように…では解散！！」
その先生の声が合図となってざわざわと生徒たちが散らばりだし、各自好きな人と好きな場所へ向かいだした。

列に並んでいた新一と目が合うが、新一は無表情のまま目をそらす。
なにか様子が変だ。
（……新一？）

「どこ行くー？せっかくだから、公園めぐってみない？ね、蘭？」
「う…うん」
園子に曖昧な返事を返しつつ、蘭はちらっと新一を見るが新一はというとさっきからずっと蘭と目を合わせようとしない。
それともあえてこちらを見ようとしていないようにしてる…？
「ねえ…新…」
言いかけたが、上から中道の声とかぶってしまった。
「っつーかさ、オレもう腹減って死にそーなんだけど。とりあえず、何か食わねえ？」
みんながはしゃぎ会話が飛び交う中、新一だけはどこか上の空で心ここにあらずといった様子。
しかしみんなは気づかない。

何かあったの？と尋ねてみたくても、なんだか気が引ける。
「食べ物屋かァ。ここからだと…」
ふと園子が地図から目を離す。その先に葵依がひとりどこかへ行こうとしているのが見えた。
「葵依ー！？みんなと一緒に行かないの？」
葵依はゆっくりと振り返って、告げる。
「……行っててい。私には、用事があるから」

――――――

視線が一斉に自分に注がれる中、新一も振り返って蘭を見つめていた。
新一も驚いているようで少し目を見開いた後、ふと寂しげな笑顔を蘭に向けた。
その笑顔に不安を覚えてしまう。
新一は歩み寄って、蘭の手をとった。
「え…？」
「わりぃけどみんなは、先行っててくれ。オレちょっとコイツに用があっから」
みんなの言葉を聞く前に、新一はそれだけ言い残すと蘭の手を引き歩いていった。

―――――――

何がごめんなのか蘭にはわからない。
今はそんな言葉を聞きたいのではない。
「……新一は…どうして修学旅行に来たの…？」
できるだけ考えないようにしていたけれど、ずっと疑問に思っていた。
事件だと言ってろくに帰ってこない新一が修学旅行のために戻ってきたなんてことはありえない。
だけどそう考えたとき、たどり着く答えなんて分かりきっていた。
新一が何のために修学旅行にやってきたのか…。
そんなの、きっと…
「……事件の…ためね？」
新一の瞳とぶつかる。
それはとても寂しそうな…苦笑ともとれる笑みとともに蒼い瞳がこちらを見る。

真実で、それでも偽りの言の葉。
葉の裏側につづってある彼の本当の気持ちに、彼女は気づかないかもしれない。
でもそれでいい。
「蘭の言うとおりさ。事件のために修学旅行に出席したんだけど、思ったより事件が複雑になってんだ…。だからなんていうか…オメーを事件に巻き込みたくねーから」
「だから避けたわけ？事件に巻き込むから？」
ばかじゃないと言う蘭の言葉を、そーだなと新一は笑って流す。

ばか…。
蘭はその時新一の気持ちがわかってしまう。
どうしてそんなことをしなくてはいけないのか、全くわからないのに…。
この後何を言われるか、この先何が起きるのか。

……新一が遠まわしに蘭と決別しようとしていることも。
別れの言葉を口にして欲しくないのに、それを急かすような言葉を言ってしまう自分に泣きたくなった。
「わたしが一緒にいれば…迷惑ってこと？」
聞きたくないのに聞いてしまう。
声が自分でも驚くほどに震えている。
「わたし、新一のために何もしてあげられない。事件のこともよく分からないよ…。だけど、ずっと…。それでもわたしは、わたしにできる精一杯で新一の手助けしようと思ったし…新一がわたしに言った言葉をずっと…信じて…きたんだよ？」
戻ってきてくれるっていった。
戻ってきてくれるなら、一緒にいてくれるなら、ずっと待っていられると思った…。
離れるために、待っていたわけじゃない。
「何で急にそんなことというの……謝るだけじゃ、分からないよ…。わたしは新一にとってなに？ただの足手まとい？邪魔…？」
いっそそう言ってくれればどれだけ楽だろう。
だけど新一は何も言わない。水色の双眸が凪のように静かで、腹立たしくてやるせない気持ちでいっぱいになる。
「……ッ！答えなさいよ！……新一は探偵でしょ！！だったら、真実を言ってよ！！どうして…っ」
真実を求めようとするあなたが、偽ろうとしているの……
あの言葉はウソだったの？約束も全部…
できない約束ならしないでほしい……
……胸がはりさけそうだ。

「……」
新一は心を殺すことに全神経を集中させる。
そうでもしなきゃ、いつおかしくなるかわからなくなりそうだ。
……足手まといや邪魔であるはずがないのに。

むしろ、いつも変わらずに帰る居場所を与え続けてくれた蘭に新一は救われていて、感謝しているくらいなのに。
しかしそれを新一の口から出すことは許されない。
目の前で傷ついてる蘭を見て、きつっと思う。
こんな顔させたくないのに。
だけど…と新一は冷静になれと自分に言い聞かし、表情を作る。
「……蘭、真実ってのはさ、なにかしら周囲の状況や感情で隠されてしまう。それを知るかどうかはその人がどれだけ知りたいと思うかと、知るだけの覚悟があるかどうか…だけど蘭オメーは知るなよ。真実なんて多かれ少なかれ人の期待を裏切って、きれいなもんじゃねーことが多いから」
にごして返す問いかけの声は、ひどく優しく悲しく蘭の耳に届いた。
どういう意味と問い返しても、新一は答えてくれないだろう。
バカ。
…わからないわけないじゃない。気づかないわけないじゃない。
本心で言ってることじゃないってこと。
だけど理由がわからない。
理由を尋ねた所でこの頑固でかっこつけは教えてなんてくれないんだから…。
「……わたしが一緒にいたらダメなんでしょ…？」
そばにいたい…たったそれだけのことを望んでいるのに叶わない。
ふわりと蘭が新一の肩に頭を落とす。
「…わかってるよ…わかったから…」
新一は蘭の頭にそっと手を置く。
ごめんな…ほんとに。
「いつか必ず…また会えて…絶対一緒にいられっから…」
その言葉を聞いて、蘭はやっとほっとできた。
あの時と同じ約束――約束がやぶられたわけじゃないんだ。
でも。
蘭は瞳を固く閉じた。

本気なのだと感じさせる。
新一と蘭との間にあった確かな絆が、断ち切られようとしている。
彼の意思は頑なで、蘭でさえそれは変えることのできない強さ。
新一は全てをひとりで背負い込み、前へ歩き続けることを選んだ。
新一の孤独が垣間見える。
この人は絶対にひとりで歩かせてはいけない…。
だけど今のわたしに何ができるだろう？
「新一は…何が大切なの？」
事件？自分？それとも……
お願いだから、自分を犠牲にしたりしないで…
胸から泣きたい衝動がこみあげてきて、蘭の瞳からは涙がこぼれ落ちた。
その涙が新一の服を濡らす。
蘭はそっと新一から離れる。
もうこれで当分、新一の顔を見れないのかもしれない。
だけどもう、ここにいるのは…新一と一緒にいるのは耐えられなかった。
そうでないと、自分が壊れてしまう。
「……バイバイ」
蘭が新一を横切って、走りさっていく。
彼女の姿がみえなくなったとき、新一は力がぬけたようにベンチにどさっと倒れるようにして座った。

『Good－bye because of Love』（後書き）

眠いです。
なんか、本編は変な方向に話が。
どうなるんだ／／／
ではまた次回～♪

『back to back』

すっと新一の前が陰る。
見上げれば、そこには静かな瞳で自分をみつめる葵依の姿があった。
「……これでいいの？」
「香川…？……見てたのかよ」
「見てたわけじゃない。私がここにいたら、あなたたちが来たんだから…。聞きたくなくても聞こえてしまう」
近くでこうしている時には確かな存在感があるのに、視界に入らなくなればその場の風景と混じってしまうような同化の性質をもつ彼女。
見られた相手が彼女だからか、不思議と焦りはない。
彼女の性格からして他言することはないだろう。
「あなたは彼女のことが大切なのに、事件に巻き込みたくないから手放すの？」
「破滅の恋を続けるよりずっといいだろ？失いたかねーんだよ…オレの中で一番大切なヤツだから」
「なにがいい方法かわからないけれど…あなたのやっていることは納得されない」
「そーかもな」
園子なんかがもし聞いたらきっと泣いて怒る。
園子だけじゃない。きっと、みんながオレに対して怒る…
そのことが容易に想像できて、新一は苦笑する。
「香川、もしオメーがオレの立場なら…」
新一が笑って立っている彼女をみあげる。
２つの瞳がぶつかり合う。
「どーする？」
葵依は、まっすぐに新一の瞳を見ながら首をかしげてみせた。
けれど、わかる。

彼女はどちらかといえば、こちらサイド。きっと同じ態度をとるだろう。
「他にも方法があるでしょう？」
「…ねーよ…」
「あなたが抱え込んでいる全てのものを捨てればいい」
「関わっている事件を手放せっていってんのか？」
「大切な人と一緒にいたいなら、他のものは捨てればいい。そうすれば少なくともあなたが大切に思う人とは、一緒にいられるんじゃないの？」
「それができないから、アイツと離れるんだよ…まぁ確かにオレにとって蘭は一番大切なヤツだけど、大切なものは他にもあっからさ…。アイツだけいればいいってわけにはいかねーんだ。それに……」
新一はフと笑って言い切る。
「オレは探偵だぜ？それが誇り……探偵として関わった以上、絶対この事件解いてやるって決めてっから、それはどうしても譲れない。だけどコレはオレの問題だし、オレの事件だから、蘭たちを巻き込むわけにいかねーんだよ。オレの身に何があっても、それまでにオレに関わる蘭や周りのヤツラとの関係がバレなきゃ、安全は守れる」
その言葉に葵依の瞳が不思議な輝きを秘める。
「間違ってるとはいわない…でも…現実はあなたの望み通りに動いてくれるほど優しくない。あなたの意思と関係なく、運命が彼女たちを巻き込む可能性もある…」
運命と奇跡は紙一重だと…「彼」が言っていたことを思い出す。
「本当のことに気づかなければ、何もかも失ってしまうわ」
「なんだよ？本当のことって」
しかしその時、一筋の風が強く吹いた。
新一は目をふせる。
噴水が吹き上がったのか、耳にしぶきの音がした。
それは一瞬の動作。
しかし、新一が目を開いたとき、葵依はもうそこにはいなかった。

今までいたのかどうかさえ疑わしいくらい存在のうすい彼女。
「知るかよ」
新一が蘭にしたかったこと…それは――
一緒にいること。
失わないように守ってやること。
それから…
「なにやってんだろーな」
立場が邪魔して動けない自分の境遇に、こんなにやるせなさを感じたのは初めてだった。

――――――

声のする方へ頼りなげに歩き進め、そっと1本の木をのぞけば、樹の枝を背にして神が本を読んでいる。
「やっぱシェークスピアって恋の話が多いよねー、夏の夜の夢とかメルヘンちっくで好きだなァ、ぼくは」
ひとりごとのようにたんたんと感想を述べる。
「ひ、光琉君…いつから…」
泣きはらした顔をみられたくないと顔をうつむかせるが、神は蘭の方を見ようとはせず、本を読み進めている。
「んで？どーしたー？」
「あ…別になんでもないの」
明らかに、なんでもない顔をしておきながらなにがなんでもないなんだろう。
しかし神は「へー」と言いながら、
「言いたくないならいいよ…無理に聞くつもりないから。いろいろ事情はあるだろーし」
「でもねぇ」と神はパタンとしおりをはさんで本をとじ、言葉につまる蘭の顔を見ながら笑む。
「一人で泣くより誰かそばにいた方が、いいんじゃない？」
友達に対してはつらくても心配かけさせまいと強がる蘭の性格を神は見抜いていた。
だから神は優しく微笑む。
「おいで」
少しとまどいながら手を伸ばしてくる彼女の手を引き、神は抱きしめる。
「知ってる？泣きたいほどつらいとき、人に抱きしめてもらうと安心するんだよ。涙が止まるまではいてあげるから…好きなだけ泣いてどうぞー」
ぽんぽんと軽く頭をたたき耳元で聞こえる優しい声は、蘭にまた涙を流させる。
ダメだよ…そんな風に優しくしないで。

甘えてしまうから……。
神の肩に顔をうずめる。
「そばにいたいっ」
いろいろ言いたいことがあるのに、言葉になるのはたった一言。
思っていたより自分の言葉が痛々しく耳に響いてきて、蘭自身も少し驚く。
ただそばにいたいだけなの。
たったそれだけのことが、難しいなんて。
「もうイヤだよ…ひとり置いていかれるのは…」
わたしのために離れるなら、わたしのためにそばにいて。
巻き込まれたってかまわないから。
守ってくれなくていいから。
――――わかってほしい。

大切にするほどすれ違う。
想いは同じなのに、立場が想っていることと別の行動をとらせるのだ…

そっと神は蘭の頭を撫でた。
そして傷ついて泣く彼女の耳にそっと呟く。
「・・・Ｐｌｅａｓｅ ｆｏｒｇｉｖｅ ｍｅ ｆｏｒ ｗｈａｔ Ｉ ｈａｖｅ ｄｏｎｅ・・・Ａｎｇｅｌ」
こうなることは分かっていたのに、彼を試すために彼女を秤にかけて利用してしまった。
かわいそうなことしたなと漠然と感じる一方で、「情より目的」という潜在意識が彼を支配する。
感情なんていくらでも殺せるのだ。

さて…、…今目の前にいる彼女が吉となるか凶となるか…。

考えふけっている様子の神を不思議に思ったのか、蘭が顔をのぞいてくるので、神は微笑む。
「シェークスピアは言いました。真実の愛とは言葉で飾るよりそれを実行に移すものなのだと…」
泣き止んだ蘭が問い返す。
「真実の愛？」
「もっともらしい理由ほど、少しはウソが混じってるものさ。言葉より、あなたの愛する人がとった行動が、より本当の気持ちをあらわしてるものだよ」
蘭に対し、少しのなつかしさを感じながら不敵に微笑んで告げる。
「大丈夫。離れたりしないさ」
そんなことできるわけないから。

――――――

恋人の名でも呼ぶように、切なく愛しそうに…彼女はその名を口にした。

「ｓｈｅｒｒｙ．．．」

『ｂａｃｋ　ｔｏ　ｂａｃｋ』（後書き）

こんにちはーーー。蒼羽　レイです。
第８部お届けです。
さて、シリアスってますが、次回からコメディ路線の模様。だってあの人が到着しますから。遅ればせながら、大阪といったらアイツ…服部君登場です。
しかーし！レイは大阪弁を生まれてこの方一回もつかったことありません！なのでめちゃくちゃノリでフィーリングで書いてます！だから間違っててもすっとばして読んでください。指摘されてもわかりません笑！ごめんなさいっ！だったら書くなよって感じだよねー。書きたいんじゃーー。

ここで…評価のことですがコメントが入っていないと、返信できないみたいです。ご了承くださいませ。
いつも読んでくださってありがとうございます。
くそ生意気な作者ですが、ムカツカずに寛大におつきあいくださるとうれしゅう思います。
ではまた次回！

『encounter』

新一が歩道を歩き、みんなの所へ向かおうとしている最中、携帯の受信音がなりメールが届いた。
携帯を取り出して、メールを開けば送信者は中道から。
今自分たちのいるおおよその場所と店名……それと。
↓　p．s．なんかシンの知り合いっつー、大阪のヤツ来てるぜ～（^0^）vv
携帯の最後のp．s．を見て、新一は一気に気力をなくす。
（でた…）
いつも絶妙なタイミングで会いにくる。新一の知り合いで、大阪って言ったら思い浮かぶのはただ1人。
これではどうにも行かねばならない気が……。
できれば行かずにすましたいが、来なかったときのことを考えるとあとが怖いと思い、新一ははァと溜息をつき、そして歩く速度を速めた。
くされ縁という言葉がある。
自分たちに当てはまりすぎている。

――――――

制服姿の東京からやってきた関東人と、私服姿の大阪人が騒いでいる光景は、店内の落ち着いた雰囲気になんとも奇妙な空気を感じさせる。
しかし、店主もその他の客もそんなことをまるきり気にしてる様子はなく、むしろ笑いながら、隣に座るおばさんなど話しかけてくる。
「修学旅行で来はったん？なら女の子もおるんやし、大阪初めてなんやったらアメリカ村とかもええと思うで」
「わー、行きたい！行こ行こー」
その時、ガラガラと引き戸を開ける音がする。
入ってきた新しい来客に、６人とも顔を輝かせた。
「あ、来た！」
服部がその姿を目に止めて、にやりと笑った。
「工藤、お前やっぱり大阪に来よったな。その姿見んの久しぶりやなァ」
「その姿って他にどんな姿があんのよ…？」
園子の鋭いつっこみに、服部と新一はギクリとする。
「あ、そそそれはなァ…最近ずっと工藤の姿見てへんかったから、コイツの姿見んの久々やなぁと…」
服部が新一を指差してぎこちなく説明をし、
「そうそう」
と新一はひたすらコクコクと頷いた。
「へー…じゃ、服部君も新一君と会うの久しぶりなんだー」
「そらもう！だけどこうして偶然会えたんも、類は友を呼ぶっちゅうこっちゃな。工藤」
「ハハ…」
（…偶然ね……）
うそつけと新一は乾いた笑みを浮かべる。
「平ちゃん、新しいお客さんか？」
店の主人がカウンター席のテーブルに頬杖をつきながら、笑って尋ねる。

「オレの大親友や。コイツもオレと同じ探偵やってんねん。名前はくど…」
その瞬間、ボカッと新一の蹴りが入る。
「いっ…！？」
なんや？と服部が新一を横目でみれば、新一は涼しげな顔で水を飲んでいる。しかしあきらかに言うなというオーラをかもしだしていた。
「し…新ちゃんと呼んだって」
（オメーな…）
（しゃーないやろ？とっさに思いつかへんかったんやから…）
「けど、みんな男前やなァ。あたしも後１０年若かったらなァ」
店主の奥さんがおぼんにお茶を１つ持って、新一の前に置く。
すると奥で店主であるその旦那がぼそっとつぶやいた。
「アホか…あとそれに２０足すの忘れてんで」
「アンタ、聞こえてんで」
ぎっとにらまれ、店主は居心地が悪くなってか、「さて仕度せな」と何か言い訳をつけて奥へと引っ込んでしまう。
「ほな、新ちゃん…注文何にします？」
「そや、まだメシ食ってへんねやろ？何が食いたいねん？言うてみ。キムチか？ねぎか？もんじゃもあんで」
「いや、オレ別に食べたい気分じゃねーから遠慮しと……」
「よっしゃ！ほんなら、元気出るよー豚にしとくか。おばちゃん、豚頼むわ！」
（って、聞けよオイ…）
「それなら、おばちゃん具いっぱい入れといたろ。育ち盛りなんや、たくさん食べ」
「おおきにーおばちゃん」と手をふる服部の横から、ひょこっと和葉が顔をだした。
「なぁ工藤君、蘭ちゃんは？一緒やったんとちゃうの？」
新一の顔がかすかに曇ったのを感じ取り、服部は不思議に思った。

（……？）
「途中で用事入って別れたんだ。あ、園子、蘭にメールしといてやってくれねーか？」
「いいけど、なんかあったの？蘭と」
一緒にいて、別々で戻ってくるなんておかしいと園子は思う。
「別になにもねーよ」
「？」
一方会沢と中道は、そんな微妙な雰囲気には気づかず夢中でお好み焼きを食べていた。
隣に座る滝川は、黙ってお好み焼きを食べながらも新一たちのやりとりに耳を傾けている。
「おまちどーさん」
新一の分のお好み焼きがきて、服部は話を変えたほうがよさそうだと感じてか、パンと1回手を叩いた。
「まぁ、あの姉ちゃんのことやからその内来るやろ！今はとりあえず腹ごしらえが先や。はよ食べんと冷めてまうぞ？」
「って、平次アンタまだ食べるきなん？さっきみんなと食べたやんか」
「あんなん食べた内に入らんわ。そんなことより、姉ちゃんたちこれから予定あんのか？」
「うーん…それがこれといって決まってないのよねぇ」
「あ、さっきも言うたけど、道頓堀行くとええよ！テッチリとか絶品やで」
「アホ！テッチリ食わすんなら、オレのオカンとこや。もし他のしょーもなぁテッチリ食ってこれがテッチリや思われたらどないすんねん。テッチリは本物食わしたらな」
本物と偽物があるのかという疑問もそうだが、テッチリを食べにこんな学生大人数で大阪府警本部長の家に行く気かよと半ばつっこみどころ満載の服部の発言に新一は、ハハと苦笑するしかない。
「そや！和葉に連れてってもらえばええ！！コイツも一応大阪人や

から、どこがええか知ってるしなァ。ま、オレには劣るけど」
「なんやのん？一応って」
れっきとした大阪人やわと突っ込みながら、和葉はふと首をかしげる。
「なら、平次はどないすんのん？」
「工藤がまだ食べとるし、オレはまだここにいるわ。姉ちゃんたちは先にいって観光してたほうがええやろ。まだ時間もかかりそうやしなァ」
ちらっと見て笑う服部に、新一はなんだか嫌な予感を覚える。
中道はそれを聞き、
「え…？オレ待っててもいいけど…なぁ？」
会沢に同意を示すと、会沢も頷いた。
「ああ」
その時、滝川がカバンを持って席をたつ。
「じゃ、行こーぜ」
「え…滝川？」
「オレ、バンドのヤツらの土産買わなきゃいけねーし。いいんじゃね？シンには後で合流してもらえば。じゃ、シン後でな」
「ワリ…滝川」
スタスタとカウンターへ向かう滝川に、会沢と中道は一瞬ポカンとする。
「あ、おい待てよ…滝川！！」
服部が和葉に笑いかける。
「じゃ、頼むわ和葉」
「ええけど…平次も食べ終わったら、工藤君とはよきてな？」
「ああ…コイツが食べ終わったらすぐ行くから、心配すんなや」
じゃあと和葉の案内でみんなは店を出て、新一と服部を除く一行は通りを歩き始めた。
「んじゃ、どこ行く？」

滝川の質問に、会沢はまだ納得いかないらしく眉をひそめた。
「なァ、本当にアイツら2人だけおいてきてよかったのか？」
その言葉に滝川はやれやれと溜息をついた。
「お前ら、気づいてねーの？」
「え？何を…？」
会沢と中道はどこか抜けた顔で、首をかしげているから、どうやら本当に気づいていないらしい。
「ああいや…いーよ、気づいてねーなら…」
「はー？気になるじゃん！教えろよ！！」
しかし、滝川は手をふるだけで教えてくれる気はなさそうだった。振り向くと、遅れ気味についてくる園子はちらちらと店を何回も振り返っている。
園子は気づいている。
そんな園子の頭を滝川はペシっと叩いた。
「ほーら行くぞ。お前が気にしててもしゃーねーじゃん」
「だって……。気になるじゃない。新一君はあー言ってるけど、絶対なんかあったのはバレバレ…」
「だけど、鈴木だってシンにそのことを聞かなかった…だろ？」
「うっ……」
聞きたかったが聞けなかったのだ。蘭の話になって一瞬だけだが変わった悲しそうな表情を園子は偶然見てしまったから。
「ほっとけって。何かはあったろーけどさ……」
「ほら、滝川君だってそう思うんじゃない」
「そりゃぁなー……でもアイツ理由言わんかったし…言えないんなら言えないで別にいいんじゃね？けどそうやってオレらが変な態度とってると、シンが余計つらくなるわけ」
「何ソレ？はぁ～あ…何でそんな風に割り切れるんだかあたしゃーわかんないわ…。普通、友達なら知りたいってゆーかさ…そういう状況で何も知らないってのはちょっとつらいのよねぇ…誰かさんと違ってさ」

「あんなぁ～、別に違わねーって。知りてーと思うし、言ってくれねーのだってムカツクに決まってんだろ？だからって話せよって強制するもんぢゃねーぢゃん。言えない理由だってあるかも知れねーんだし…黙って普通に接すんのだって、ある意味友達じゃんよ」
新一の場合ならなおさら。
学校にたまにしかこなくなっても、なにをやってるのか分からなくても新一という人格が変わったわけではない。
友達なら分かって受け入れてやるのも１つの友情表現だ。
園子だってわかっているのだ。
だけど正直に出る気持ちはやっぱり少し疎外感を覚える。
そんなウラハラの気持ちをはらそうとしてか、スネた仕草で滝川の腕を軽く叩いた。
「痛って…！？なにっ？」
やつあたり。
「別にー？」
滝川をおいてスタスタと進む園子。その行動の意味するところがわかった彼は笑って園子を追いかける。そして、スネた顔をのぞきながら、
「オイ、待てよ！お前、明日彼氏来るから、抜けんだろ？」
「そーよ！！真さんにこのわけわかんない気持ちを癒してもらうんだから。あんたもギターばっか弾いてないで、彼女の１人でも作ればいいぢゃない」
「彼女ねぇ…。あ、そういえばさ、今オレらのバンド金なくてさぁ…ステージたてねーの。援助してくんねーかな？お嬢サマ」
「イ・ヤ！！」
滝川はつれねぇヤツと言っているが、さほど残念がってもいないようで、むしろクスクス笑っていた。
そして店へと振り向く。
「あのさー鈴木……思うんだけどオレ達こんなこと言ってっけどさぁ…」

今思っていることが自分のこととも重なって、滝川は苦笑した。
人に言えない秘密の恋を自分もしているから。だから、アイツの気持ちが少しだけ分かる気がする。
「人に言えねーこと抱えてる本人たちが一番つらいんじゃねーか…？」

『encounter』（後書き）

こんにちは。蒼羽レイです。
少し、大阪っていう感じをだしたいなぁと思って書きました、今回。
でも、あたし大阪に行ったことがないんですねー。
なのに大阪の感じをだすって意味わかんないですねー。
さて、大阪っていえば、「お好み焼き」というイメージがレイの中にはありましてですねー、それで今回お好み焼きを題材に書かしていただきやした。
あとはこんな雰囲気いいなあと思って書いてたりと結構自分の理想が入った感じ笑。お好み焼きのおばちゃんのとことかそんな感じ♪
大阪の人には、勝手な解釈してんじゃねえって感じたことと思います。すみませんー遊んでいじってしまって。

ではでは、また次回お会いできることをxxx。

『hidden heart』

その頃、店の中では、服部が機嫌よくお好み焼きを食べている一方、新一は不機嫌にまゆをひそめていた。
みんなといるときと明らかに違う2人の間に存在する「わけあり」の雰囲気があたりに漏れ出す。
「んで？」
新一はコテを使ってお好み焼きを口へと持っていきながら、尋ねた。
「なんでオメーがここにいんだよ？」
「そんな邪険にせんでもええやろ？せっかく2人きりにしてやったっちゅうに」
からかいまじりに笑う服部に、新一はムッとして頼んでねぇよといった表情をみせた。
「あーのーなー、だからオレが言いてーのはわざわざ偶然を装ったあげく人払いしてまで、オレに言いたいことがあんなら今言えってことだよ」
「よーわかってるやないか♪」
服部は少しの間コテをもてあそんだ後、カタンと皿の上にコテを置く。
「そんじゃ、お言葉に甘えて言わせてもらお…なーんも連絡してこんといきなり大阪に来たったと思えば、元の姿になってるんはなんでやってなァ。そこんとこちゃーんとお前の大親友で名探偵のオレに説明せェって言いたいんや。ほら何があったんか言うてみ？」
にっこり笑いながら言われるが、なんだか表情と空気が一致していない。
空気は明らかに、黙っていたことに対する不満であふれていた。
（ハハ…笑ってっけど、怒ってやがる）
予想的中。
「そりゃー、少しは悪いって思ったけどよ……連絡してたら、オメ

ーオレに会いにきたろ？」
「そら、学校さぼって真っ先にお前に会いに行くに決まってるやないか、工藤君♪」
ポンと肩に手を乗せられ、「ハハ…やっぱり」と新一は乾いた笑みを作る。
（んなこったろーと思ったから、アポなしで来たんだっつーの）
連絡しようとしまいと、しかし結果的には同じことだったことに、なんともいえないくされ縁を感じて、力が一気にぬける。
ここまできたらと、新一は溜息混じりに事情を服部に話しだす。
「目立つワケにはいかねーんだよ、今回は」
（もう十分目立っとるやないか…）
そもそもここにくる間、園子をはじめみんなとは新一の話をしていたのだ。
休学中の「工藤新一」が修学旅行に来るというので、B組をはじめとする学年全員が彼の噂でもちきりだったらしい。
なかには、愛すべき蘭と修学旅行の思い出を作るため、事件を投げ出してきたというなんともステキなラブストーリーも語られているが。
服部は思う。
（アホ…コイツにそないなことできるわけないやろ）
コイツがこの姿で現れた理由は1コだけ…

そのとき机の上に、無造作に何かが投げられる。
1枚のフロッピーだった。
「あん？何やこれ？」
「ヤツラの組織に関わるフロッピーさ…。中身はまだ分からねーが、何か組織に関する情報が入ってるはずだぜ。ただ暗証番号と組織のパソコンでたちあげねーと中の情報が開かねーようになってるみてーだけどな」
「はぁん…なるほどなァ。この情報が引き出せれば、もしかしたら、

お前を小っさしたっちゅうその組織を、闇ん中から、おてんとさんのもとへ引きずり出せるかもしれへんしなァ」
「まーな」
「それで？まだあるやろ？」
「まだ？」
新一が首をかしげると、服部がニヤッと笑った。
「あの姉ちゃんのことや！何かあったんはバレバレやぞ」
動揺してか、熱くなっているコテが思いっきり舌に触った。
「熱っ…」
手で口をおさえた後、水を一気に飲む。
そうして水を机に置くと、新一は目を泳がせ少し考えながら、
言いにくそうに小声で、
「…やっぱりバレてる…よなぁ」
「バレバレやで。あの茶髪の姉ちゃんも、すました兄ちゃんもたぶん気づいとったで。あとの2人は分からんけど」
「あー知ってる。……蘭とは…切れてきた」
「はァ？何言っとんねん」
（信じられんわ…）
しかし服部の気持ちとはウラハラに、新一の目は本気だった。
「ああ。アイツとは電話もメールも会うのもやめるって決めた」
一息ついてから、新一は、
「…この修学旅行が終わったら、蘭とはもう一切関わらねーつもりだよ。新一のときも…コナンのときも…。アイツがこれ以上オレのそばにいるのは危険だ」
「なんやそれ？ちょっといきなりすぎるんとちゃうか？…ほんならあの探偵事務所はどないすんねん？」
「東京に戻ったら、探偵事務所は出てくさ」
服部はがくっと一気に脱力した。
（コイツはもうー…）
いきなり大阪にきたと思えば、元の姿には戻ってるし、様子がおか

しいと思えばいきなり組織の話…そこまではまぁいいとしても…探偵事務所を出て行って、そばにいた蘭とはもう会わない？
なんだそれ。
（コイツ本気で周りと孤立しよる気や…）
「アホ…そらいくらなんでもかっこつけすぎやで。自分一人背負い込んで、全部守ろうとすんのはホンマ…お前らしィ思うけどな、そやけどわかってるんか？あの姉ちゃんは、そんな事情なんも知らへんのやで？」
「……」
わかってる。
蘭はなにもしらない。そしてなにも知らずに離れようといった新一の言葉を、蘭はなにもわからないままそれを受け入れてくれた。
それがどれだけ彼女の傷を深くしたことだろう…
蘭と会ったのはついさっきなのに、もうずっと前のように感じられる。けれどどうしてか涙を流して「さよなら」を言った蘭の姿だけが頭から離れない。
「たとえ一時やったとしても、お前にやっと会えたっちゅーに、そんな突き放し方はないと思うで…。そこまでせんでもええんと…」
（言うなバーロ…んなことオレが一番わかってんだ…）
言わなきゃいけなかった…絶対蘭を守りたいから。
どいつもこいつも…
責められるのは承知の上だけど、言われればやはりつらい。不本意なのだからなおさら。
「バーロ。オレだってあんなこと言いたかねーさ…」
思いを全部吐き出すような、そんな声。静かなのに、激しい感情。
その言葉の重みを受け止めて服部は切なそうに口元に笑みを作る。
「……やっと本心言いよったな」
「え…？」
「お前ホンマ周りのことはよー気ィつくくせに、自分のこととなるとさっぱり分からんようになんな。お前の気持ちがオレにも分かる

んや。オレよりずっと長くいるあの姉ちゃんは、きっと気ィつくで」
新一が離れた理由も、どうしてあんな風に傷つけたかを――
新一の頭に、蘭の声が響く。
――わたしは新一と一緒にいることが大切で、離れたくないよ…
分かってる、痛いくらい。
新一だってホントは同じ気持ちなのだから。
それでも…
「遅かれ早かれ…オレ達の存在は組織にバレる。逃げ場がなくなる前に、巻き込んじゃならねェ人たちとオレたちとの間を断っておかねーと、動けなくなんだよ」
「なんやそれ？お前が与えた逃げ場に、その組織が追いかけてこないっちゅう保障がどこにあんねん？」
コイツらしくもない。
いつもは攻めの一手で相手を切り崩すのに、守りに入る彼に違和感を感じずにはいられない。
「……工藤お前、怖いんやろ？…全てを失うかもしれへんことが」
「当たりめーだろ？オレは自分の力を過大評価しちゃいねーよ。現実的に考えてみろよ。オレは探偵って言ってもただの高校生…コナンのときなんて小学生だぜ…？ＦＢＩが動いているとはいえ、日本で組織の人間以外で、組織のことについて知ってるヤツなんてほとんどいやしねーよ。そこから情報は得られない。だから、組織と接触したければ、組織の人間と接触するしかねーんだ…それがたぶん組織にたどり着く一番の早道だと思うし」
「なら何で言わへんのや？」
服部が真剣な表情で、尋ねてくる。
そしてフと笑み、
「工藤、お前なら気ィついてるはずやで…全員に真実を話すんが一番ええ方法やってな」
そうすれば警察関係者にも政府にも耳に届く。
「バーロ！そしたら、関わった全員が殺されるぞ」

「殺される前に、壊滅させたらええやろ！？お前が一番動きやすくなる方法やんけ」
「……ッ」
図星をさされて言葉につまる。
新一だってもちろん気づいている。
必要だと思う人に全てを話すのが一番いい方法……でもそれは一番やりたくない方法だ。
証拠もあいまいな現状では、命の危険が伴う。
その方法をとりたくないから、新一は蘭との縁を切ってまで避けたのだ。
それなのに、服部はその方法を取れという。
「…なァ、工藤…そろそろこの辺が潮時や思うで…この際、全部みんなに話すべきなんとちゃうか？」
「却下。んな危ねーことできっか…」
ガタッとイスをひいて新一は立ち上がる。
先行ってると言って、彼は店から出て行った。
そんな彼の背中を黙って見送りながら、服部はためいきをこぼした。
「お前だけが、命はって戦ってる姿なんて見てられへんで…」
あの姉ちゃんだって同じ気持ちだろーに。
伝票をヒラヒラさせながら、服部は頬杖をつく。
「少なくともオレは、お前と命かける覚悟ができてんやけどなー」
ホンマ…頑固でかっこつけで手に追えへんわ。
笑いながら、服部はガタッとイスを引いて立ち上がった。
「おばちゃん、会計頼むわァ！」

『hidden heart』（後書き）

こんにちは。蒼羽　レイです。
さて今回、新ちゃんと平ちゃんしか出ていないという笑
さてさて話の流れから、この話どうやら長編になりそうな予感。あ、
もうあたしの作品だからそう思ってるって？
なんか最後がどうなるかは決まってるんですが、中間部分が決まっ
ていないっていうね…笑
テスト前だからと更新しないつもりが感想読んでいくうちにじゃあ
ちょっとだけ書こうかと書き進め、終わってから気づく…はっあた
しったらなにしてるんだぁぁ！？
いつも感想ありがとうございますですー。

ではでは。また次回！

『schemed plot』

服部が店から出て行くと、新一の横に並んで歩く。
「ほな、そのフロッピー早よもらいにいったろーやないか」
「って人の話聞いてねーだろ、オメ」
「オレは別にええやんけ。お前の正体もしっとるわけやし。案内人が必要なんやろー？オレが案内したるわ」
（だからそうじゃなくってよ…）
これでは危ないから遠ざけていた自分がなんだかばかばかしく思えてきてしまう。
しかし、思えば服部は前からこういう向こう見ずな性格だ。
「ったく、知らねーぞ。なにかあっても」
服部の方は譲る気はさらさらない様子を察し、新一が折れる。
「そやそや。人間素直が一番やで。心配せんでも何かあったらオレが守ったるしなァ、頼りになんでぇオレは」
「ってオイ…」
よしよしと頭をなでられ、あからさまな子ども扱いに新一の心境は複雑である。
「いつもちっこいお前といるせいか、子ども扱いが抜けへんねや♪」
あからさまにわざとである。
「服部、生物科学開発第3研究所って知ってるか？」
「ああ！あのわけのわからんやたらでっかい建物か」
「バッカスの暗号によれば、そこにヤツらに関する情報がなにかあるはずなんだ」
「ほォ。なら…その研究所も組織の息のかかった場所の可能性は高いっちゅーこっちゃな」
「ああ、まだそうとは言い切れないけどな。ま、行ってみればわかるよ…」
冷静で落ち着いている。

けれど、その態度の裏にどれほどの気持ちを抱えているのだろう。
「行くんやろ？」
と確認するように尋ねた服部の意図を察してか、新一は不敵に微笑み言った。
「あたりめーだよ」
そして新一は時間を確認する。
「明日の夜、ホテル抜けてその研究所に行くから服部オメー来るならちゃんとバレねぇように来いよ」
たぶん間に合うだろう。
いつ発作が起きるかわからない。明日は3日目の夜。
灰原の言葉が蘇る。
――最高で5日間。工藤君の場合一度元に戻っているから、もしかしたら薬が効きづらくなっているかもしれないけど……――
「……」
「まァいざとなったら、オカンに事件や言うて口合わせてお前の先公に電話したったるから心配すんな」
「…ハハー」
（それが一番心配だぜ）
大阪府警本部長から、事件だと電話がくる先生の立場を考えてみる。
（…よしたほうがいいんじゃねーか？）
思っても口に出さなかったのは、新一自身もそれは最終手段として使う気でいたからだ。
その時ふと、服部が携帯を取り出す。
そして画面をみてさっさとまたしまってしまう。
「？」
「ほな、そろそろ和葉たちと合流しよかー？」
「今の彼女からだったのかよ？」
服部は頭で手を組みながら、
「ああ。さっきから何べんもメールきて早よ来い早よ来いってなァ。バカのひとつ覚えみたいでわけわからし、うるそーてかなわんわァ」

（ハハ…向こうからすれば、わけのわかんねーのはオレらだよ…）
「ったく、それを早く言えって。やべっ、こんな時間じゃねーか」
みんなを待たせているということを忘れていて、新一はばつの悪そうな顔をする。
「別にほっといてもかまへんやろ。なんや、買い物楽しんでるみたいやしな」
和葉からメールが送られてくるたび、今いる場所と状況が本文に書かれているのだ。
今は女子たちは古着屋に、男子たちはギターショップに言ってるのだという。
しかし新一は見過ごさず気づいていた。新一が明日の夜と言わなきゃこのままほっといて自分と行く気だったということだ。
（コイツ…）
その時、ブレザーを見て肝心なことを思い出す。
ちょっと目を離したすきに服部はなにやらイカの串刺しを買ったらしく両手にある2本のうち1本を新一の口へといれる。
「どや？うまいやろーこれ」
「服部」
口に入ったイカの串を左手で持ち直すと、右手でポケットにはさんであるボールペンを取り出す。
そして新一は手帳に何かを書き始めた。
「このイカいける」
【帝丹高校に組織の仲間かもしれない疑わしいヤツがいるんだけど】
そしてさらに書き続ける。
【今、盗聴器と発信機がオレに付けられてんだ。おそらくつけたのはソイツで】
盗聴器…服部の部分はごまかした。
あとは、これでどうでるか。
【ソイツの名前は…神光琉。たぶん蘭とオレは1度会ったことがある…】

何か言いたそうに顔をあげる服部に、新一は笑いながら「しっ」と口に人差し指をたてた。

――――――

静かな瞳で見つめ、出る言葉は確かな感情を持っていた。
「あなたを今すぐ殺したい」
「殺ってみる？」
がちゃっと差し出された銃をとって、葵依はかまえた。
バンッと一発、放たれる。
しかし、弾は１ｃｍくらいの差で、神の横の壁にめりこんだ。
「あなたたち組織の人間を見ていると反吐がでる」
「お褒めにあずかり光栄です。囚われの姫君」
軽く頭を下げる神に対し、葵依は銃をベッドに放り投げると、部屋を出ようと歩き出した。
「ＦＢＩに情報売ってんの…あんたさバレたら消されるよ」
「時間がないの、わたしには」
ふぅと溜息をつき、神は言った。
「まだ探す気かー？シェリーを」
「……」
その問いには答えず、葵依は振り向く。
「工藤新一をどうする気？」
「…どうもしないよ。泳がせとく」
耳にしていたイヤホンを聞き、彼は笑む。
「だけど余興は礼儀でしょ」

『schemed plot』（後書き）

こんにちはーー。蒼羽レイです。
さてー、大体役者がそろって明らかになってきたといったところでしょうか笑：次回では、今度蘭ちゃん方面で新事実がまた浮上。
次の夜の展開が楽しみですねー。私は楽しみだけどくるのがおそろしいです笑。いろいろ頭を使わなくてはなので笑。
ではではーーー。また次回！か、感想掲示板でお会いしましょーーー笑ｖｖ

『ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ　ｔｏ　ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｈｅｒ　ｂｙ』

夢見の中で想いを描きます。ひたむきで…それはそれは１つの偽りもない、まっすぐな絵を。
あなたの前では、うまく伝えられないかもしれないけれど……
そのかわり少しだけサインをおくるから――
見逃さないでね、どうか聞いていてね……誓うから――
たとえ離れても、言ってくれたあなたの言葉を私は何度も信じるから……
必ずまた、一緒にいられるように……
願わくは…言葉を歌に…心に…力に……どうか…。

それは守ってくれるあなたへの最初で最後の惜別の歌――

――――――

それからどのくらいの時間がたったのだろう。
木を背にうたたねをしているとも取れる蘭のもとへ、美紗がふいにやってくる。
陰を作る幹の間から、陽光が葉の隙間から流れ出し、シャワーのように降り注いでいる。
美紗は、蘭の近くへいくと座り込み蘭の顔をじっと眺めた。
「ホントに寝てるのかな…？」
クスクスと笑いながら、両手で頬杖をつき蘭の寝顔をしばらくおもしろそうに見ていた。
蘭はいいな。
素直で誰にも好かれる。
純粋でひたむきでいい子で。大好きだけど、その分自分の汚れていることを浮きぼりにされる。
「ごめんね」
ホントはねたんでたときもあったんだよ。
誰でも好かれるあなたのこと。
シンと会えなきゃいいのにって思ってたりした。
だけど。
『ミサの歌ってなんか心に響くなぁ。たくさん気持ちがこもってる気がするもの…優しいのに激しくてあたし好きだよ』
その笑顔に、お世辞はなくて…。
そして美紗にとってその言葉は色褪せない、大事な宝物になった。
分かる気がした…彼女は自覚はないけれど人の本質を見抜く。
がんばるからね、あたし。
歌の世界で生きて、歌の世界で死ぬために――
離婚した親からもらったものは、何一つない。
学校も存在を消される毎日。
誰一人信じられなくて心に麻酔を打ち続けた。
彼女はそっと手首に手をおく。

ほとんど消えたリスカの跡。烙印でもあるかのように、一生痛み続けるけれど…。
「前を見なきゃ」
自分のとりまく世界は1つだけじゃない。
闇に入っても出口はある。あの時、抜け出せなかったのはあきらめたからだ。自分を守ることで精一杯でまわりを見ようとしなかったからだ。
過去になにがあったとしても、未来は違う。前に進まなくちゃ、今までのあたしとは変わらない。
それに気づかせてくれたのは、その蘭の言葉と滝川の存在だ。
ありがとうって言いたかった。

その時ふと蘭の目からぽろっと涙がこぼれ落ちた。
「蘭？蘭…」
揺すってみても起きない。
「……新一っ」
かすかに呟かれた言葉に少々驚き、美紗は心を痛める。
蘭には蘭の傷があるのだ。
美紗は蘭を抱きしめる。
「蘭…どうしたのっ？」
少しの間抱きしめると、彼女はゆっくり離れた。
そして…
「～～～～～～～～♪」
好きだと言ってくれた歌をうたってみる。
少しでも癒されるといい。
新一のことを思って泣く蘭が、自然と自分とも重なっていく。
泣かないで。
美紗はありったけの気持ちで強く歌う。
彼女のためと…今最も会いたい恋人のために――

心地いい。
優しい旋律の子守唄。
遠くで聞こえるかすかな歌声。
その歌が、霞がかっていたものを晴らす。
現実と夢の狭間の中――その映像は鮮明に映し出された。
銃口をつきつけている青年。
逆光のせいなのか顔がよく見えないが、じっとたたずむそれには恐怖を植え付けられる。
すると彼は、引き金をひいた。
自分は息をのんで、それを見ている。
数弾の発砲音の後、目の前の男が地面へと倒れた。
それを見届け去っていく人をじっと見つめ、ふとその中のひとりに目がとまった。
研究者と見られる服を着た…赤みがかった茶髪のあれは――――
しかしそのとき、がっと誰かに下から腕をつかまれた。
見れば、さっき倒れた男が口から血をはきながら、血走った目で何かを訴えている。
いやっ…
「やぁぁっ！！」

――――――

「おはようございまーす。寝覚めはいかが？」
冷や汗をかいている蘭に、美紗はいたずらっぽく声をかける。
しかしその後、安心させるように頭をなでてやり、微笑む。
「怖い夢でも見た？」
あれは…夢？
ううん…あれは。
いつのまにか、涙が頬を伝っていた。
「うん…怖くて哀しい夢…」
忘れていた…夢の封印が解け始める。
全てを知らなければいけないと思った。
全部思いださなきゃ。
「大丈夫？」
心配そうに声をかける美紗に、蘭はうんと頼りなげな返事をかえす。
「どうしてかな…まだ夢が頭から離れないの…」
……欠けたピースが埋まりだす……
なにがどうなっているんだろう…？
蘭は、顔の上へ腕を交差させた。
「…哀ちゃん……」
――――――

ふと、キーボードを叩くのをやめ窓の外を眺める。
空は快晴。
それにも関わらず、暗い地下室でひとり灰原はパソコンを打っていた。
そのパソコンの画面と自分の今の状況を合わせて、寂しく微笑む。
「そろそろホントにお別れかしら…」

『ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ　ｔｏ　ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｈｅｒ　ｂｙ』（後書き）

こんにちはーー。
今回は、本文若干少ないですね／／／／
さて、美紗ちゃんの視点にちょっと置いたりで。
嫌わないでやってください笑。
さて蘭ちゃんの中の謎もだんだんと明確になり。
しかし明確になればなるほど謎は深まる一方なような笑
さて哀ちゃん。
一番このストーリーのキーセンテンスです。
最後のセリフの意味は一体なんなのかぁ～。
気になるところですねーー笑

最近た、た、多忙すぎてちょこちょこしか書けないぃ～～ムンクの叫び。

ではまた次回笑！

『ｔｒｕｅ　ｆｒｉｅｎｄｓｈｉｐ』

その翌朝――

園子は、携帯を手に取る。
今日は、真と会う日。
それはもうすごく楽しみなのだ。
だけど、１つここで問題が…
園子は、ちらりと横目で蘭を見ながら、はぁと溜息をついた。
「ちょっと蘭？そのどんよりした空気してないでさー、さっさとご飯食べちゃおうよ！」
朝食の席。さっきからフォークを持ったきり、全く料理に手をつけていない。
心ここにあらずで何かを考えているようにずっと、

一点を見つめている。
「なにがあったの？新一君と」
「え？」
顔をやっとあげた蘭に、園子は頬杖をつきながら、
「バレバレなんだから。言ってくれれば話聞くわよ」
「うん。ありがと園子。でもいいんだ」
「そうなの？」
「うん！大丈夫だよ」
その言葉の響きと蘭の表情からは、あきらめというより何か決意に似たものを感じた。
強く真っ直ぐ見つめる今の蘭の瞳の輝きは、新一の眼差しを思い起こさせる。

「園子は京極さんと今日デートでしょ？」
「そうそう。大阪城で、待ち合わせしてるんだ」
「へー。じゃあ1日中デートするんだー」
「もちろん。久々に会うんだし、これから会えない分も含めていっぱいラブラブしなくちゃね～」
ハートがまわりに飛び交っている様子の園子に、蘭は笑う。
「あっやばっ、もうこんな時間！じゃあ私行くね！！」
時計を見て、慌てて席を立つと蘭に両手を合わせてごめんと伝える。
「ううん！京極さんによろしくね」
「…蘭、恋は気持ちが出やすいの。だから偽っちゃダメよ、ね？」
園子はとびきりのウインクをすると、「そんじゃ行くかな♪」と意気揚揚と出て行った。

そこにひとり残った蘭は、並べられた料理を眺めながら、そして今園子に言われた言葉を反すうする。
そして、蘭は笑った。
「そうだね、園子」
いつか、それをアイツも言っていた。
――偽れば偽るほど、真実は浮き彫りになってくるんだ――
なら真実を探しに行こう。偽りだと信じるカケラを集めて。

「園子さん、その服は少し胸元が開きすぎかと」
「今時、これくらい普通よ」
聞く耳もたずと言った風に、園子は真の腕にからみつく。
その園子の積極的なアピールに、少々照れたようにで真はそっぽ向く。
しかし、嫌ではないようでそのまま歩き出す。
小物や、出店がたちならぶ。
そこの並木道を通りながら、真は微笑んだ。

「自分はやっぱり日本が好きですね、特に関西が…。なんていうか、自分の雰囲気と合うんで」
「あ、そんな気がするー！真さんて古風な京都って感じよね」
「でも東京も自分結構好きですよ」
「そう？」
「園子さんが生まれた場所なので」
「え？」
ストレートだ。その意味がわかるまでに数秒。
それから、園子の頬が一気に赤くなった。
「真さんって、絶対天然よ！」
「は？」
ま、そんなとこが好きなんだけどさ。
「ところで、さっきからなぜ何回も携帯を見ているんですか？」
「え！？」
自分でも無意識にやっていたことを指摘され、なにやってるんだろうと携帯を見つめた。
しかし理由は分かっているのだ。
「蘭がちょっと元気なくてさ」
「蘭さんが？」
「そ。だから、連絡あったらすぐ出れるようにと思って。たぶんこないけど」
意地っ張りで、強がりで優しい子だから、デートの邪魔になると思って彼女は絶対してこないだろう。
でも、してきたらと思って携帯が気になっていたのだ。
すると真が急に笑い出す。
それにムッとした園子がすねた表情をしていると、
「いえなんでも…ただ園子さん、あなたはやっぱり優しい人ですね」
「はぁ？」
「友人を大切にする優しい人…園子さんのそこに自分はとてもほれたんで」

「な、なによ！？いきなり」
真は微笑んで、
「自分に出来る限りの力で周りに元気を与える…自分もその元気をもらった一人ってことで」
自然に笑顔がこぼれる。
叶わないなぁ。
一見すれば2人はある意味、正反対どうしかもしれない。
でも、だから惹かれあったのかもしれない。
（私は、真さんのそういう一途でまっすぐなトコにほれたんですよーだ）
園子、超感激。
そうして、携帯をとりだすとボタンを押し、どこかへと電話する。
「あ、もしもし、井上さん？うん、あたしあたし！なんかさー大きいライブハウス貸し切って欲しいの。そうそう」
しばらくのやりとりのあと、園子はふぅと電源を切り、また誰かにかけ直そうとしている。
「なにをしてるんです？」
「え～？自分に出来る限りの力で周りに元気を与えてみようかなって」
いたずらっぽく園子が言う一方で、真はまだ状況が飲み込めずにいるらしく目を点にし、首をかしげる。
「ま、いいからいいから。ところで、真さん明日の夜まで平気？」
「え、ええ。まぁ」
「やったぁ！」
にこにこと笑う園子があまりに嬉しそうだから、真は余計何をするのか気になった。
それを尋ねてみても、にっこりと笑うだけで答えてくれないのがつらい。
「それは明日の夜までのお楽しみなの！」
そして、園子は電話の続きをかける。

電話の相手は。
「あ、もしもしタキー？」
ーーー

「工藤いんじゃん？」
「ああ」
「学校ずっと来てなかったくせに、いきなり出てきてしゃしゃってうぜーよなって話してたら、いきなりコイツが入ってきたんだけどー」
「へぇ」
滝川が涼しい顔で高橋の話を聞いてるので、会沢はムッときた。
「ちょー滝川！コイツら工藤の悪口いってんだぜ？」
「お前ちょっと悪いけどダマって」
会沢の口をふさぐと、高橋に「んで？」と先を促す。
「お前もそー思わね？探偵とか言ってろくに学校こねーしさァ。知ってるか？噂じゃ、死んだって言われてたんだぜー。マジうけるし～」
高橋の取り巻きが一緒になって笑っている。
「あ、わかった！今の工藤、もう死んでて亡霊なんじゃね？自分の殺した犯人捕まえにきたんだぜきっと」
さらに笑いに拍車がかかった。
しかし取り巻き以外は、その温度差の激しい言い争いをはらはらしながら見てる。
誰もが、止めるべきだとわかってる空気は伝わってくる。
しかし、ともすればすぐはりつめた糸が切れだしそうな勢いであるため、誰も手をだせずにいる。
会沢がその言葉にぶち切れたのが、滝川もわかった。
殴りこもうとする勢いで飛びつこうとしている。
滝川は、テーブルの上にあった夜飲み残した酒をみた。
「てめっ、ざけんなっ」
その時――
バシャッ。
殴ろうとして会沢が勇んでいくより先に、滝川が高橋にコップいっぱいの酒をぶちまけた。

うわっと背後からは驚きの声がわく。
そして会沢も、滝川の行動に自分の怒りの衝動も一気に吹っ飛んだ。
「お前にシンのなにがわかんの？」
あまりに予想外のことをされ、高橋は一瞬あぜんとなる。
しかし、自分がされた状況が把握できてからは殺意の思いっきりこもった目で、滝川をにらんだ。
「てんめっ」
「お前みてーな能無しバカみてっと、ムカツク通り越して虫唾が走んだわ。探偵だの、警察の救世主だの言われて、その名を背負う重みも覚悟もわかんねーで平気でそういうこというヤツ」
高橋は滝川の胸倉をつかむ。
「クズ」
胸倉をつかまれたまま、滝川が一言そうはき捨てた。
高橋が殴ろうと腕を出すと、それを中西が制した。
「殴ったら先公きて、停学か退学」
ホテルの電話の受話器をとりながら、挑むように中西がそう言う。
それをやばいとみて、高橋の取り巻きが懸命に彼をなだめやめさせる。

そして高橋たちが部屋から出て行くと、その場にいた全員が肩をほっとおろすかその場に突っ伏せた。
「お前、高橋にケンカうるなんて無謀なことやめろよ！マジ心臓縮んだから！」
「ホント」
中西が受話器をおく。
「どーすんだよ。絶対目つけられたぞ今ので」
「別に平気。そん時はそん時」

そしてその夜――――
滝川の携帯に1通のメールが届く。

宛先は非通知。
内容は――
「やっぱ、あのままってわけにいかなかったよなぁ」
マジ、めんどくせぇ。
しかし、滝川はしばらくベッドにつっぷした後、勢いよくベッドから起きなにやら仕度をし始めた。
そしてホテルを抜け出す。
冷たい夜が身にしみる。
これから、何をされるのか滝川は大体想像がつく。
携帯をかけると、中西がでた。
『もしもし』
「あ、中西。ワリ、オレだけど。今からアイツ、オレとケンカしたいらしいから、タイマンはりいってくるわ」
『はっ！？ちょっと待てよ！！どういうことだよ！？』
「内緒にしとけよ。じゃーな」
ピと携帯を切る。
そして、メール画面をもう一度見て彼は溜息をついた。
こんな挑発に普段は絶対のらねーんだけど…
「マジやってくれるね…」
【今から公園きてくれる？っつーか、お前来なかったら毛利マジで犯すから】
夜の風が身にしみる。
星と見慣れない夜の町並みのイルミネーション。
外を抜け出したことがなかったからわからなかった。
木々に電球が絡められそれが点灯し、並木道がなんとも幻想的な感じに仕上がっていた。
誰かさんが喜びそうな場所。
一緒にこれるといいけど。
（ミサ…）
顔と骨を折るのはやめてくれるといいけど。

顔を殴られれば、みんなにバレる。骨を折られたらギターに当分触れない。
後はなんとかごまかせるし。
でも…
滝川はタバコを1本吸い、くすっと笑いピンとポイ捨てる。
（そうなると、当分お前が抱けねーや）

『ｔｒｕｅ　ｆｒｉｅｎｄｓｈｉｐ』（後書き）

こんにちは～～蒼羽レイでーすｖｖ
おひさしぶりかなぁ。
本当は今回の話、次回の話と一緒に登校しようと思ったんですけど、書ききれなくてですねーーー／／／
もういいやこのまま投稿しちゃえって感じで←
結構長文だし、そしたら更新おそくなっちゃいそうでしたし～ぅー。
いつも読んでくださってる方ありがとぉ！
また会えたら光栄ｖｖでわまた。
初めて、京極さんに挑戦。あー私って自分が腹黒いから純粋な人がうまく書けないんだぁぁ！なんてこと！泣））しくしく
次回！結構あたしの中で好きなストーリーだなぁ。。ぜひ見てねｖｖ新ちゃん服部くん、今回お休みだけど、次回でるよ～！次回は中間地点のファイナルです。もりあげちゃあ！
もしよろしかったら感想ください。レイはいっつもそれを楽しみに待ってるもんでｖｖ

『ｔｈｅｍ　ｗｈｅｒｅａｂｏｕｔｓ』

ネクタイをしめ、スーツに袖を通す。
表情は、普段演じていた彼の性格と打って変わり、どこか冷ややかで落ち着きをはらっているようだった。
２つの双眸は凪のように静かな眼差しであるが、強い眼光を放っている。
風呂場には、空になった染髪剤。
黒に染め、トパーズの瞳をいっそう際立たせるものとなった。
「さて、行きますか」
祭りののろしをあげに……
彼は一度だけ振り向きふと笑うと、パタンとドアを閉めた。

――――――

けど来るなっていわれてよ」
「え…」
電気がはしったように、美紗の体に衝撃がつらぬいた。冷水を浴びせられたような感じだ。
うそでしょっ…
「どこに行ったのっ!?」
異常なまでに取り乱す美紗に、中西は少し驚きながらも答える。
「わかんね。だけど、公園の方に向かってくのは見たって…おいっ待てよっ」
最後まで言い終わらないうちに美紗がその場から、走り去ろうとしたので中西は慌てて引き止める。
「女のお前がいったとこで、何も変わんねーよ!」
「ミサが止めなきゃ!!!タキを停学にさせたくない。アイツはね!!」
やばっ、泣きそう。
「キレたら加減がきかないの……周りも自分の立場も全部忘れちゃうのよっ」
その必死さに中西は手を放す。
「お前と滝川ってやっぱ…」
その呟いた言葉は美紗に届いていたけど、美紗はそれには答えない。ただゆっくり後ろにさがり、静かな目で訴える。
「先生には言わないで…」

『高橋たちが工藤の悪口言っててさ、んで、会沢がキレて殴ろうとしたときに、滝川が酒ぶっかけてアイツを怒らせたんだ。たぶん、会沢をかばいながら高橋にケンカふっかけたんだろうな。冷静を装ってたけど、滝川も相当そん時キレてたぜ…だってアイツ、ダチがなんか言われるの一番嫌なヤツじゃん?』
中西から大体の事情を聞く。
ズキッと胸が痛くなる。

お願い間に合って…ケンカなんてしないで。殴っちゃだめ。
殴り合っている所を想像して、ぎゅっと心臓が締め付けられた。
ダメ、お願い……。
ホテルを出て、走り、角を曲がる。
どこ…タキ。

ホテルの近くの小さな公園。
周りが木々で囲まれ、外から中の公園を全て見渡すことは困難。
そんな真夜中の公園には、水銀灯が2つついているだけである。
「おまえら、マジバカなんじゃねーの？」
「テメーだろ。マジうざいからー。シャシャってんじゃねぇよっ――」
ガンッと右頬に高橋の拳が思いっきり入る。
最初に衝撃を感じ、後から頬が熱くなってきた。
口を切って血の味がし、ペッと吐く。
思いっきり滝川がにらみつけると、高橋がせせら笑う。
「B組の毛利だっけ？工藤の女。アイツになんかしたら、あのいけすかねえスカした面割れそうだよなぁ」
「うっわ最低。言っとくけどお前じゃムリムリ。こうやって陰でこそこそするヤツって世間でなんていうか知ってっか？負け犬っつーの」
言うと同時に今度は蹴りが腹に、拳が頬に入る。
「ゴホッゴホッ――ゴホッ」
プツっと滝川の中にある理性の糸が切れる。
立ち上がって高橋の胸倉をつかんだ。
「殴ったら停学だぜぇ？」
その言葉に、滝川は笑う。
「ハッ！停学怖くてタイマンはれるかよ。お前ホント頭悪いね。俺がキレる前にやめりゃァいいのに」
そして、さっきの彼とは違う残酷で殺気走ったものが滝川の目に宿

る。放つオーラが禍々しい。
「殴ったら停学だっけ？」
じゃァと滝川は高橋を蹴りまくる。
「おら、立てよ！！テメーがふっかけてきたんだろ」
「上等だ。てめっ」
お互いつかみかかって、高橋が滝川の顔を殴ろうと手を伸ばす。
その瞬間――
滝川の顔に当たるはずだった高橋の拳は、美紗の体にあたった。
「なっ…んで、お前」
その衝撃に耐えられず、美紗はその場に倒れた。
それを見た滝川が、無言で高橋の方へと向かう。
いけないっ。
「死ねよっ！」
伸ばした滝川の手を美紗の両手がすがるようにからみつく。
「ダメ、お願いやめてっ」
しかし、滝川の耳に美紗の声が届いていない。
「お願い、やめてよ！やめてってば…お願い、タキ」
ふらふらになりながら泣きながら訴えても、彼はなおも殴ろうとしてやめようとしない。
その腕を体全てで必死にとめる。
「やだよぉ…ヒック…。タキ、お願いもうやめて…」
その時、スッと後ろから美紗の体を支えるように手が差し伸べられた。
くしゃくしゃになった顔で見上げてみる。涙でにじんだ目でぼやけるが、そこにいたのは新一だった。
優しく微笑んでポンポンと頭をなでると、ハンカチを差し出してくれた。
「ごめん、ミサ」
そうして、美紗を滝川から離す。
枷がなくなった滝川が、高橋を殴ろうと手をあげた。

しかし、パシッとその拳は高橋の前で遮られる。
服部が片手で滝川の拳を受け止めていた。
「そろそろ正気に戻ったほうがええでーホンマ」
澄まして笑みながら、服部は美紗の方を見る。
「見てみィ…泣いてるやないけ。あんな細っこい体してアンタを止めようとしてたんやで？」
服部に言われて美紗を見れば、新一に支えられて泣いている。
やめてと何回も言っていたのは、聞こえていた。
頭が冷えていく。
そして今さらになって、美紗がやめてと泣いて叫ぶ姿が思い出されて、滝川はいたたまれない気持ちになる。
新一のほうへ歩み寄る。
「シン…」
「来るのが遅くなって悪い。事情は大体中西たちに聞いたからよ」
「ごめん」
「謝んなくていいさ。オレのためだって聞いたし。ま、やりすぎだけどな」
高橋をちらっと見て、新一は滝川の肩をポンっと叩く。
「ミサ連れて先にホテルに戻っててくれるか？」
滝川は何か言いたそうに新一を見たが、その言葉を飲み込んだらしい。
「わかった。後よろしく」
そして、美紗の方へ歩いていく。
ベンチに座っていた美紗は、少し顔をあげたが滝川と目を合わせようとしない。
そんな美紗に、滝川はその場で頭を下げる。
「ごめんなさい…」
その言葉を聞いて、やっと元に戻ってくれたのだとポトッと美紗の目からまた涙が出てきた。
滝川は血のついた右手では美紗に触れないと思ってか、左手で美紗

の涙をふいてまぶたにキスをすると、彼女を立たせてホテルへ連れて行く。

2人を見送り、新一は高橋に向き直る。

「別にオメーの言い分は否定しないぜ？当たってるトコもあっから。ただよ…」

きっと言い分はもっといっぱいあるだろうに…。

しかし、新一は何も言わない。

「今度からオレになんかあるんだったら、直接オレに言えよ？そんだけ」

それだけ告げて、新一は服部を連れて公園から出て行く。

服部は両手を頭にまわすと、にやりと笑う。

「ま、今の工藤が亡霊で自分の殺した犯人探してるっちゅーのはあながち外れてへんもんな」

（オイ…オレはまだ死んでねぇっての）

「だけど、勝手にホテル抜け出して姉ちゃんが知ったらまた心配するで？」

一番痛いところをつかれて、新一は言葉につまる。

「オメーこそ、彼女ほっといていいのかよ？」

「ああ！和葉のことか？アイツなら、心配するどころかたぶん怒ってるで」

――――――

「自分が、うまいラーメン屋見つけたからって誘ったんやんか」
いつものことながら、ドタキャン。
もう慣れたケド、腹たつ。
「平次のアホ――――――

「え…？」
灰原に姉妹がいるとは彼女に言っていない。
そのことを蘭が聞いてくる理由が１つだけ思い浮かんだ。
「貸して」
灰原は博士から受話器を受け取る。
「もしもし？」
『あ、哀ちゃん！？』
本人が出てくるとは思わなかったのか、電話ごしの蘭の声は驚いているようだった。
しかし、さっき博士にも質問した問いを灰原にも尋ねてきた。
『哀ちゃん、あのね…哀ちゃんってお姉さんとかいる？』
少し沈黙が続き、灰原は口を開いた。
「うん…どうして？」
『あ、ううん。なんでもないの！ただちょっと聞いてみたくなっただけ』
「そう…」
もちろんそれで納得したわけじゃない。
『ごめんね、変なこと聞いて。えっとじゃあ、おやすみ哀ちゃん』
「おやすみなさい」
お姉ちゃんと心に浮かんだ言葉は、言わないでしまっておく。
そうして電話を切ると、博士が尋ねてくる。
「いきなりどうしたんじゃろうか？蘭くんは。それに新一くんからは連絡が来ないし、大丈夫かのォ」
「さあ？彼のことだから事件に夢中なんじゃない？私眠くなったし、寝ようかしら」
そういってベッドにつく。
電気を消せば、わずかに差し込む光だけとなった。
…思い出してしまったのね。
ぎゅっと枕を抱く。
もう、彼女を巻き込まないで組織と接触するのはムリかもしれない

わよ…工藤くん。
そして自分も。
遠い昔の記憶。
封じ込めた呪いの言葉。
【志保、お前に一任する。教えておくから、お前が決めてくれ…パスワードはｘｘｘｘｘだ】

――――――

滝川は新一の登場に驚いて

『ｔｈｅｍ　ｗｈｅｒｅａｂｏｕｔｓ』（後書き）

こんちゃ。
疲れました。なんか。もう書いたのマッハでした。
さってー、なんかやばそうな雰囲気。
そして、次回は新ちゃんたち潜入。
そろそろクライマックスへ～～～。
がんばります。感想書けるかたプリーズｗｗ
めっちゃやる気でるさかいに、よろしゅう頼んます。
では。

『trap』

マジックミラーで覆われた、横に長い建物。
研究所とあってか、なるほど周りと孤立している。
建物と同じ高さに囲まれた塀がいっそう、その建物で行われている出来事を隠そうとしているかのようにみえた。
今野総一郎が隠したフロッピーの場所…
それ以上に新一は少し気にかかっていることがある。
バッカスの研究…灰原の父親も関わっていたという、その内容だ。
「学会ではマッドサイエンティストとして有名かしら」
灰原の言葉が新一の頭の中で反芻した。

「で、どうやって入んねんコレ。当然セキュリティーは万全やろうしなァ」
セキュリティどころか、門からして入れない。
「乗り越えるか…ん？なんや、こんなところにインターホンがあるで」
服部が押そうとする。
「…待て服部、オレたちの存在がバレるのはまずい」
インターホンには顔が映る。
新一はふと視線をインターホンに落とす。
変わったインターホンだ。
形は丸く、スピーカーとカメラがついているのは普通だけれどその下には丸いへこみ。
指が入るにはひとまわりくらい小さいが指紋認証器のように、そこに何かがおかれるみたいな…
「……！？」
この大きさ――
「なんや？どうしたん工藤」

「あの館に行った時の、暗号になってた宝石似せたガラス玉があんだけど…」
言いながらポケットを探って取り出すと、服部の前に差し出して、口をつりあげる。
「合いそうじゃねーか？」
服部も新一の持ってるガラス玉を見て、瞬時に理解し、ふっと不敵な笑みをこぼした。
新一がインターホンの穴の中にガラス玉を入れれば、それはぴったりとはまった。
「ビンゴ」
服部のその言葉を合図とするように、ガチャっと施錠が解除される音が聞こえた。
2人は顔を見合わせて、頷きあう。
お互いの独特な探偵だけがかもしだす冷涼な雰囲気が、いっそう強くなる。
服部はぼうしを被りなおした。
「行くぜ」

ピコンピコン――
警報のように部屋の中に赤いサイレンがまわる。
ぷかぷかと吸っていた老人がにやりと笑う。
「フォッフォ…客人じゃな」

「大体、あんなところで普通インターホン押そうとするか？」
「ええやろ、入れたんやし。思い立ったら行動するのがオレの主義やねん」
「オメーオレの正体がばれちゃいけねーの忘れてんじゃねーだろうな…」
声を落としながら、進む。

「しかし変な建物やな。研究所につくまでの道も塀で囲まれてるやないけ」
周りの環境が見えず、両脇に塀。あとは直線状に研究所につながっている。
まさか真っ直ぐ研究所にきなさいということじゃないだろうし…。
「ま、よそ見せんとはよ研究所に来いっちゅこっちゃな」
言った先から彼のこのセリフは、緊張感をひどくなくさせる。
（……だからそれは違うだろ）

たどり着くと、自動ドアが勝手に開いた。
新一と服部は顔を見合わせる。
「ほんじゃ、お言葉に甘えて」
足を踏み入れば、薄暗い。非常口の光だけが怪しく廊下を照らしている。
新一は時計型ライトの光を細めた。
あたりを照らしながら、ライトを上へとかざす。
監視カメラはねーみてーだな…。
カツカツと歩いていけば、その先に1ヶ所だけ光が漏れていた。
こんな時間に人…？
「おい、服部…」
「ああ…」
その電気のついている場所を目指し歩き進め、ドアの前で立ち止まる。
新一はそっと部屋がのぞける程度にドアを開けようとする。
すると中から声がした。
「堂々と入ってきたらどうじゃ、そこのお二方」
（なんやバレてるやないけ…）
新一が1つの溜息とともにドアを引けば、そこには70歳前後と思われる老父が煙管（きせる）をふかしていた。
「フォッフォ、よく来たのう」

なにもかも見透かしたような、表情。
今時レトロちっくな黒のチョッキを羽織、パイプをふかし、酒を飲んでいる。
2人を品定めでもするように、上から下まで見た後、彼はクックと笑う。
「死ににきたか」
「はぁ？なんや。おいジイさん、オレら忙しいねん。っちゅーかなんでこんなトコに居座ってんねや？どー見てもここの研究所のメンバーとは違う気ィするんやけどな」
「まぁ、そう急くでない、お若いの。老い先短い老いぼれの相手をしても、まだまだ時間はたっぷりあるじゃろうて。というより、ワシが命をまだひきとめてやってるだけありがたく思ってほしいもんじゃが…」
イスに座っている老爺が、新一を見つめる。蒼く冴えた彼の瞳は、老爺の指輪を見ていた。
新一から視線をはずし、老爺はまたパイプをふかす。
「ワシの後ろにある扉を開ければ、パソコンが一台ある。お前さんの持っているフロッピーにも対応できとるはずじゃ…」
「そうですか」
一言だけ言って、新一は彼をすり抜けてその扉へ手を伸ばそうとする。
「エンジェルはお前さんのもとに戻ってくるかの…」
「え？」
とっさに振り向くが、彼はそれ以上は言おうとしなかった。つぶやいた言葉の理解ができない。
新一はふと思い立ち、自分の洋服から発信機を外した。
「ああ、それと」
老爺に向かって投げる。
「忘れ物ですよ」
後ろから投げられたモノを、見もせずに手でキャッチする。手を広

げれば、それは発信機だった。
彼はにやりと笑う。
新一は服部と共に中へ入り、パタンと扉をしめた。
なにかしらの罠があるだろうことは、重々承知していた。
煙管をふかしていた彼は、上品に足を組み背筋をまっすぐ伸ばしていた。老爺と思わせぬ態度である。
「ベルモット仕様なのに」
バリッと仮面をとると、黒い髪が風になびいた。

『ｔｒａｐ』（後書き）

こんにちは。お久しぶりです。
最後の更新からずいぶん経っちゃいましたね～
一体レィのことをどれほどの人間が覚えててくれているか笑”
評価や感想や、メッセージでも早く更新してほしいというめちゃめちゃ嬉しいものをもらいましたので、うろ覚えですみませんが、頑張って思い出しながら更新させてもらいましたー。
お待たせして申し訳ありませんでした。
それと感想とメッセージをくれた人全員読みました。
返信もしますのでお待ちくださませ。
この人たちがいたから、続きを書こうと思えました。
背中を押してくれてぁりがとぉ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5498a/

＋The Phantom of Moonlit＋

2010年10月9日18時49分発行